
遊戯王 5 D's 転生者です、ごきげんよう

クアンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう

【Nコード】

N9478X

【作者名】

クアンタ

【あらすじ】

テンプレによって遊戯王5D'sの世界に転生することになった瀬川遊奈。彼女は大好きな遊戯王の世界で、新たに得たデッキとともに波乱の人生を送る。

彼女が駆け抜ける先には何があるのか。
それはまだ誰にも分からない。

※この作品は転生オリ主、オリカ、原作再構成ものです。苦手な方はブラウザバックしてください。

そして作者のクアンタはあらず詐欺を多用します。
次回予告詐欺の常習犯でもあるので、ご注意ください。

プロローグ（前書き）

はい悪びれもせず連載があるのにまたやりました。
クアンタです、ごきげんよう。

あらすじを見ていただいたら分かるとおり、本作は遊戯王5D,
S
の二次創作であり、かつ私TUEEEEを目指した作品です。

そこのあたりをご理解していただいて上で言います。

ゆっくりしていいってね！

プロローグ

ふと気がつけば、そこは真っ白な空間だった。

いやいやねーよ。

ついこんな考えに至った私は悪くはないはずだ。

それもそうだろう。

たとえ理解力がある人でも、いきなりこんなところに連れてこられて何がどうなったかなんて分かるはずがない。

……いや別にナニじゃないけども。

さて、現実逃避はやめて目の前のリアルを直視しますか。

「そろそろ頭上げてもらえます?」

「いやしかし、これは私の過失であるからして、誠意を見せねばなりませんのでご理解下さい」

ああ、つまりはきちんと謝ってんだから許してよ、ということなのだろう。

私としても墮落しきったフリーター生活を終えられるなら、こんな形であっても構わないんだけどね。

というかこの状況はあれだろう。

生前（この表現がしっくり来た）によく読んでいた二次小説にはよくあった展開だ。

つまりテンプレだ。

まさかリアルで遭遇するとは、思いもしなかった。
現実逃避したつもりがまさか真実を見ていたとは、私もなかなかやるわね。

さて自己紹介といきましようか。

私の名前は瀬川遊奈。せがわ ゆうな

遊戯王が好きなただのフリーターよ。

アニメは見てないのだけでもね。

容姿は、まあ自信はあると思うわ。

デュエルの腕も、友達の中では一番だったし。

……そろそろ受け入れましようか、リアルを。

「えーと、一つ聞きたいんだけど」

「どうぞ」

「テンプレ？」

「ええテンプレです」

当たって欲しくなかったけど、まさか当たるとはね。

「事情を理解してらっしゃるということは、このあとのこともお分かりですね？」

ああはいはい特典ね。転生特典。

基本的にはだいたい三つくらいから五つくらいだったかしら。

てか行く場所を決められるなら遊戯王の世界に行きたいな。

あそこってデュエルだけでも生きていけるんでしょ？

だったら私にとってこれ以上最適な世界もないわね！

「行きたい世界は遊戯王ですね。受領いたしました」

えっ。心を読ま・・・ああ、テンプレね。

心を読まれることすらすでにテンプレで片付けられるなんて、便利な世の中になったわ。

次は特典かしら。

「ええそうです。四つまでなら叶えられます。そして私はミカエルです」

えっ。ミカエルとかテンプレじゃないじゃん。

てか天使長に頭下げさせるとか。私、外道じゃん。

あれ、なんか忘れてるような・・・ああ、特典ね。

「えっとー。じゃあオリカで構成されたデッキを三つ、自分で作れ

るようにしたいんだけど」

「その場合は三つ分の消費となりますが、いいですね？」

あーうー。ちよつとしょっぱいな。

でもまあオリカ創れるんだし。対等な対価かな。

「あと遊戯王の世界って、やたらと主人公サイドが特別な仕様なんですよね？」

「ええ。カードゲームもこのような仕様となるなんて、誰もが予想できなかったでしょうね」

そりゃそうだ。

どこの世界にカードで世界を救うなんてあほなことが起こるのだろうか。

……私が今から行く世界か。

んー、特別な力が必要なら、私も貰つところかな。

原作介入じゃなくて、自衛？

だって私、遊戯王のアニメ見てないし。

仕事してたし、部活やってたし。

「あとの二つはどうしますか？」

「そうですね。一つは主人公たちに負けない程度の特別な力を下さ

い。もう一つは、んー、何にしようかな？ 残りは、まあまあな資金を下さい」

「随分と現実的な要求ですね。ですが私は嫌いではありませんよ、そういうのは……ですが、ドロー運などは要求しないのですか？」

それは当然でしょ。
だって、それは、

「自分自身がデッキの中に眠るキーカードを引き当てた時のあの満足と興奮は、そんなまがい物では味わえないものなのよ。私は、それをどこでも感じたいだけなの」

そう、あの感覚だけは、同じデュエリストなら共感できるはずだ。

「……分かりました。そろそろ特典の受領も完了します。そしてあなたをかの世界に送る準備も完了しています。ここから送られるのも時間の問題です」

「そうですか。ありがとうございます。ところで一つ聞きたいんですけど」

「何です？」

今まで気になっていたこと。それは、

「私の死因ってなんですか？」

ぶっちゃけ気になるのもしかたがないだろう。
初めての経験なのだから。

「ああ、それはですね。転落事故です」

転落事故？

どういうこと？

「あなたが死んだ時に歩いていた歩道橋は罅がありまして、それを補修したのはいいのですが、あなたが歩いていた場所にバグが発生してですね。あとはおそらくご想像通りです」

なーる。それならまあいいか。

ぶっちゃけ言うと、むしろ社会にさほど影響をなさない私が死んでいて助かった。

これがこの時死んだのが著名人なら大騒ぎだったろう。

「あなたは淡泊な人ですね」

「生まれつきです」

あ。体が透けてきた。

そろそろ世界を渡る時が来たんだ。

「ご……運……」

なんて言ったかは聞き取れなかったけど、きっと激励してくれたんだろうな。

頑張らないとね。

プロローグ（後書き）

さてさっそく続きを執筆DA！

よろしければ拙作の別作品も見てくださいね。

遊奈「宣伝とか・・・ないわ・・・」

まあそう言うなって

次回 『サテライトの姫』

次回まで、ごきげんよう

一話『サテライトの姫 瀬川遊奈』

みなさん、どうもこんにちわ。

瀬川遊奈です。

あの白い空間から旅立って、早七年です。
十歳です。早いですね。

え？

なんでこんな投げやりかって？

それについてはですね、私が幼女化していたからよ！
気が付いたらだいたい三歳くらいのベビーボデーになってて驚いたわ。

でもまあよくある授乳プレイとか経験しなかっただけマシね。

そうそう今私がいる現在地んだけどね、どうやら私サテライトってここにいるみたい。

簡単に言うと廃棄物リサイクル施設ね。

なんか出来て間もないみたいだけど。

きつと気のせいね。

そうだ、白い空間で思い出したけど、まだオリカは創ってないわ。
起きたら横にKC製のデュエルディスクと、ディスクにセットされてた生前の私のデッキがあったから、今はそれでいてるわ。

他のカードが欲しいなって思ったら、近くにカードが落ちてたりするしね。

そういえばその時に一緒にカードを拾う子がいて、その子とも仲良くなったわ。

名前は不動遊星っていったかな。
蟹みたいな髪の毛が印象的だったなあ。

カードが揃ったらデュエルしようって約束したけども、あいにくと
遊星がどこに住んでるかなんて聞いたことないし。
まあまたいつか会えるよね。

それよりも最近、困ってることがあるのよね。
それは・・・

「姫ー！ 今日の飯、取ってきやした！」

「姫！ 俺はレアカード拾ってきやした！」

「姫！ わしゃあ使えそうな家具を拾ってきやしたぜ！」

「姫！」「姫ー！」「ひーめー！」

「ああもう、うるさいな！ 私の家に大人数で入ってくるなー
ーーーーー！！！」

舎弟といいますが、家来といえますか。

とにかくそんな人たちが大量に来るんですよ。

尊敬に染まったきらきらした目を輝かせながら・・・orz。

なにがいったいどうなってこうなったか、みなさんに教えましょ
うかね。

※※※

あれは、まあ数ヶ月くらい前です。

神様補正か知りませんが、無法者が集うこのサテライトでも私はすくすく育ってたわ。

けっこう住みやすそうな場所も見つけました。

それから数日後のことね。

私の住処に、住人ちかくのデュエルギヤングがやってきました。彼らはそこにいた私に向かって、開口一番こう言ったのよ。

「ここは今日から俺達のアジトだ。慰み者になりたくなかったらとつとと失せな」

と。

とりあえずむかついた私は彼らに向かって言い返したわ。

「そういうのは実力で決めるのよ、このロリコンどもめがっ！」

ええ、バックブアード様ですね、わかります。

それにキレて、幼女（私）にデュエルをしかけてきた彼らですが、まあ今の彼らの実態をしたらなら想像するのも容易いでしょうね。

ええ、フルボッコしました（ドヤア

といっても仕方ないと思いますけどね。

こんな環境で手に入るカードなんて知れてますし、いい感じのカードなら私と遊星と一緒にいた子供達ジャックとクロウっていったかながあらかた回収しましたからね

（ドヤア

※※※

そんなわけで彼らは基本、それなりのバニラしか使いませんし、魔法・罠カードもほとんどありません。

そんな状況で、いいカードをそろえた私と戦っても、十中八九負けるでしょうね。

まあ？

心優しい私は、彼らを許して帰らせたのですが・・・。

・・・・・・その結果がこれだよ。

笑いなさいよ。

あれが彼らにとっては始めての優しさだったそうで、今ではもうすっかり姫、姫と。

調子に乗った報いですかね。

それにしても最近面白いことがないな。

遊星も私と話すときは顔を見ないし。

ジャックはキングごっこしてるし。

クロウは子供の世話ばかり。このロリシヨタコンめが！

ごめん嘘。だからゲイル投げようとししないで。

「おーい、変態ども。なんか面白いことないー？」

「姫、それならここいらにけっこう強いガキがいるって噂ですぜ。
あと変態じゃねーです」

「案内なさい、変態」

「もちろんでさ！ あと変態じゃねーです」

ほんと、こいつらの返しは面白いわ。

ていうかサテライトで、遊星、ジャック、クロウ。
聞いたことあるわね。原作キャラだっけ？

ていうかもう一人、サテライト関連で誰かいたような。
友達にMAD見せてもらった時に見ただけど・・・。
うがー！ 思い出せない！
もういい！ 会ったら思い出すでしょ！

一話『サテライトの姫 瀬川遊奈』（後書き）

次回からようやくデュエルです。

みなさんは、お分かりでしょうが、次回に出るのはあの人です。
みんな大好きですからね。

遊奈「誰よ？」

あなたも会えば分かるよ。

次回『満足少年』

それでは次回までごきげんよう

二話『満足少年の憂鬱 レッツ・サティスファクション!』

さあ、来週の『遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう』は？

遊奈です。

今日はサテライトの中でも海沿いのところにやってきました。

変態たちがデュエルが強いという少年がいるというので、ついてきたらそこにいたのはMADで腹筋がお世話になったあの人だったんです。

私のデュエルディスクを見るなりデュエルを開始しようとする彼は私はどうすれば・・・?!

来週の『遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう』は

遊奈のデュエツ!

満足、私は満族

サティスファクション

の三本で送りいたします。

それでは来週まで。

じゃん、けん、ぽん!

うふふふ。

「ふっざけんな、この変態どもーーーーー!!」

「ひ、姫がご乱心だーーーー!!」

「クリスティアは、どうかクリスティアは勘弁をーーーーー!!」

「なんまんだなんまんだ」

「なんなんだよ、こいつら」

水色の髪の毛の少年がぼやいてるが、今は彼に構っている暇はない。
というかその彼が問題なのだ。

だって彼の名前は、鬼柳京介。
5D'sで一番の知名度といっても過言ではないはずだ………
たぶん。

彼を有名たらしめるその要因とは、すなわち満足だ。
いや何を言ってるのとかじゃなくて、まじで満足だ。
これ以外にいいようがない。

MADのおともとして重宝され、その人気っぷりはとどまるところ
を知らず、全国に満族という固定のファンを作るほどだ。

私もMADで見た程度のにわかだが、彼は素晴らしい。いや腹筋ク
ラッシューだが、同時に涙腺クラッシューの彼も知る私としては、
あんな結末にはしたくないな。

彼を見た瞬間、私はだいたい忘れていた塵ほどの原作知識を思い出
した。

遊星、ジャック、クロウってもろにメインキャラですよん。私エ・
……。

「おい、お前ら。俺とデュエルしてきたんじゃねえのかよ？」

「そうだったわね。じゃあボコボコにして、満足してやるわ」

「満足？ いい言葉だな。なら俺もお前を倒して満足してやる」

あれ？

この頃ってもしかして、まだ無満足期？
満足ってそもそも知らなかったの？

えー。じゃあ私、変なことしちゃったよ。

でもまあいっかな。

デュエルするだけだし。

「始めようか」

「おう、行くぜ」

「^{デュエル}決闘！」

遊奈

LP4000

手札5

鬼柳

LP4000

手札5

「先攻、俺のターン！」

手札5↓6

「なにが来るのかな」

「俺はブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚」

ブラッド・ヴォルス

ATK1900

うわあ、ソリッド・ヴィジョンってやっぱりパナいわね。
かっこいいなー。

そいえば、キャードって言わないね。

あれはダークシグナーの時だけなのかな？

まあいいや。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

鬼柳

場

ブラッド・ヴォルス（攻撃表示）

伏せカード一枚

今さらだけど、よくブラッド・ヴォルスなんて見つけたね。
なかなか見なかったのに。それもジャックに取られちゃったし。
別にいらないけどね。

「私のターン、ドロー」

手札5↓6

これは……この手札はすごいわね。

「速攻魔法発動！ サイクロン！」

「ちっ、ヘイト・バスターがつ」

「そして手札の神秘の代行者アースを除外して、マスター・ヒュペ
リオンを特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン

ATK2700

まだ終わらないよ。

「手札からヘカテリスの効果発動。デッキから、神の居城―ヴァルハラを手札に加える」

「そいつは自分のフィールドにモンスターがいる時は発動できなかったんじゃないか？」

「いやこれでいいよ。私が欲しかったのはコストだからね」

「何・・・だと・・・？」

いやこっちがそれだし。

なぜそのネタを知っているし。

でもなんか弄りやすそうだな。

まっ、今はデュエルに集中ってね。

「墓地のヘカテリスを除外し、マスター・ヒュペリオンの効果発動。あなたのブラッド・ヴォルスを破壊するわ！」

「ちいっ！」

「まだ終わってないよ。私は奇跡の代行者ジュピターを通常召喚！」

奇跡の代行者ジュピター

ATK1800

「これで攻撃力の合計は4500。あなたはライフはゼロだよ！」

「ワンキルだと！」

「いっけーーーーー！！！」

私の2体のモンスターから放たれた二つの光が、彼を包み込んだ。

ソリッド・ヴィジョンって衝撃はあるんだね。

彼………っていうか鬼柳くんが軽く吹っ飛ばされちゃったよ。

「おい、大丈夫？」

「おう、それにしてもお前強いな。俺は鬼柳京介だ。お前の名前はなんつうんだ？」

知ってます。なんて言ったら変だし、素直に初対面のふりしところ。

「私は瀬川遊奈。私のことは気軽に遊奈と呼んで。私も京介って呼ぶから」

「ああ、これからよろしくな遊奈」

その時、私は確信した。

彼はとんでもなく面白いことをしでかす、と。

これが後にサテライトの伝説となるチームサティスファクションのリーダー鬼柳京介と、サテライトの姫と呼ばれる瀬川遊奈の邂逅だった。

二話『満足少年の憂鬱 レッツ・サティスファクション!』(後書き)

今回使ったデッキは、今の環境で活躍中の代行天使ですね。
知人がストラクチャーデッキ買ってそのまま大会出たら、まさかの
ベスト4進出とかいうふざけたことをしでかしたデッキです。

てか効果みるだけでこんな風に動くんじゃないかね、と理解できるほどの
シンプルさ。故に強力。

いや色んな動かし方があるとは思いますが、すげえどね。

TG代行とか、色々種類もあるみたいですね。

本編のほうですが、鬼柳さんとのフラグと思えそうな地の文入れま
したが、カップリング成立させるのは蟹さんです。

あとジャックとカーリーです。

鬼柳さんはなぜか、横にいる女性がまったく思い浮かばない。なぜ
だ。

まあ鬼柳さんが満足してくださるなら、我々満族も無問題なんだけ
どもNE!

遊奈「今回の後書き、長すぎじゃない?」

まあまあいいじゃん。

遊奈「前もそれで流された気がするけども、まあいいわ。それで次
回は?」

ああ今回はまた時間が飛びます。
アニメ本編開始まで。

遊奈「早。でもまあそうじゃないと暇だしね」

お前は遊星と遊んでろ。

遊奈「だって最近、遊星ってば私の顔見ないもん」

これだから鈍感は。

よし、リア充は無視して次回予告だ。

次回『サテライトの赤き二つの流星』

それではみなさん、次回まで

遊奈「次回までごきげんよう」

取られたっ・・・・・・・・！？

三話『サテライトの赤き二条の流星』（前書き）

どうも、クアンタです。

今回はようやくオリカ登場です。

そのオリカですが、まあ、ちょっとやっちゃった感があるので突っ込みはご遠慮ください。

三話『サテライトの赤き二条の流星』

京介との出会いから八年。あれから色んなことが起きた。その中でも忘れられないことが、二つある。

それはチームサティスファクションのサテライト統一と、京介の逮捕だ。

大切な仲間がセキュリティに連行されてしまった。それに同じサティスファクションのメンバーである彼らが関わっていたことが、京介を絶望させた。

連行されていく一部始終を見ていたが、あの時の京介の表情は忘れられない。

その時自分自身に抱いた無力感と、屈辱も。

友を救えないなんて、いや私は自分の保身に走ったのだ。

今更どうこう言う資格などないのだ。

とにかく、あの一件からメンバーと私たちのメンバーの間では、あの事件はタブーになった。

そう言えば二年前にジャックがシティに渡ったと遊星から聞いたけど、もしかして本当にキングになったのかな。

私の住処は電波が悪くてテレビが映らないからね。

「姫ー。そろそろ遊星さんのアジトに向かうんじゃないんですかー？」

「そうだったわね。私のD・ホイールはどうなっているの？」

「完璧に調整が完了してますぜ、姫！」

「そう。なら、大至急向かうわ！　あなた達はいつでも来なさい！」

「「「姫がおられるところに俺らアリでさあ！　いつでも見守ってますぜ、姫！！」「」」

ああもう本当に、この変態どもはどうにかしてしまえないかね。そう思ってるのに、笑えちゃうわ。

あいつらってほんとに、一緒にいて楽しいもの。

ガレージについてみれば、そこに鎮座しているのはアジトの主たる私の足、D・ホイール。

その名もスカイ・フライヤー。

赤いボディは遊星のD・ホイール、遊星号と同じだった。

名前の由来は風を切る感覚が、空を飛んでるようだったからそう名づけた。

遊星も笑顔でいい名前だって褒めてくれたし、あの時は嬉しかったな。

なんでかは分かんないけど。

ヘルメットを被り、ハンドルを下ろす。
エンジンを作動させる。

私のD・ホイールは一般的なバイク型だ。
だからこそデザインも豊富で人気も高い。

でも私にはそれはあまり関係ない。

この甲高い回転音さえ聞けたならそれで満足できる。

それくらい私はD・ホイールを、スカイ・フライヤーを愛している。

この風が後ろから追いかけてくるような感覚は、本当に最高だ。

※※※

「やっほー、遊びに来たよー」

「お、遊奈じゃん」

「なに・・・！」

「相変わらず、遊星は遊奈と聞くとすぐにそっちに向かうな」

「そりゃそうだろう、だって遊星は・・・」

「お前達！」

「はいはい、黙ってるよ」

なんか言い合ってるけど、どういうことだろう？

あ、ブリッツがため息ついてる。

なんか嫌なことでもあったのかな？

「遊奈。今日という今日こそは、俺とデュエルしてもらおうか」

「そうだね。私もやっと思つてたデッキが完成したんだ」

そう。待ちに待ったオリカデッキ。

あーでもない、こーでもないと言つて頭を捻つて完成させたこのデッキで、遊星をぼこぼこに……。

『あー、あー。聞こえているか、ラリー・ドーソン。お前の居場所はずでに割れている。大人しく出てきて我々に連行される』

あ、あれつてセキュリティの追跡ヘリじゃん。

てかまたラリーは盗んだのか。

今度は何を盗んだのよ。

「ラリー！ やっぱりの部品は盗品だったんだな！」

「ご、ごめんよ。でも遊星が今作つてるD・ホイールは俺たちの希望だろ！？ だから早く完成してほしかったんだ！」

いくらなんでも行動力ありすぎでしょ。

それよりもD・ホイールの部品ってそう簡単に盗めるものなの？

「だからってなあ……」

「もうそれくらいでいいだろう。これ以上俺達で争っても仕方がない。お前達は逃げろ」

「遊星はどうするんだよ？」

「俺が・・・」

「俺が囧になる、でしょ？ 私も手伝うわよ？」

そんな面白そうなこと、この私が見逃すわけないでしょうが！

「だが・・・」

「あーもう。そんな顔しないの。私の強さは知ってるでしょ？」

「実際にデュエルしたことはないんだが」

あはは、そういやそうだった。

まあいいや。

ライディングデュエルは滅多に出来ないんだけど、面白いし、それにけっこう向いてると思うから大丈夫でしょ。

「遊星はそっちから。私はこっちから行くよ」

「・・・分かった。無事で帰ってくるんだぞ」

「りょーかい。じゃあ私のアジトでね」

「ああ」

さーて行きましょうか。

飛び乗るようにしてD・ホイールにまたがり、ヘルメットを被って勢い良くペダルを踏みこむ。

Gに押されてシートに押し付けられるこの感覚は、やはり最高だ。

地上に続く坂から勢い良く飛び出る。

十数メートルほど飛んだあとに、着地して後ろを見る。

パトカーが一台に、D・ホイールが二台。

あ、一台がこっちに向かってきた。

これは好都合。

タイマンでいけるじゃん！

「む？　なんだ、貴様マークー持ちではないのか・・・囧になったか、取り残されたか？」

「さあ？　どっちでしょう」

「ふん。貴様に構っている暇などないが、貴様もD・ホイールに乗っているのなら出来るのだろうか？」

「もちろん。返り討ちにしてやるけど？」

「ほざけ。そうだな、私が勝ったら貴様のデッキと、そのD・ホイールは没収だ。永遠に帰っては来ないぞ」

そっちがその気なら、こっちだってなにか条件がないと割に合わないわ。

この世は全て、対価がないと駄目だからね。

「だったら私が勝ったら、今回の件には目を瞑ってもらおうかしら？」

「ふん、いいだろう。ただし、勝てたらの話だな」

「上等！」

フィールド魔法、『スピード・ワールド』セット。
オート・パイロットは・・・なし！

「貴様、オート・パイロットなしだと!？」

「当然！ 機械任せなんて、してられないわ！」

スタンバイ、完了。
もう準備は完璧ね。

あとは宣言だけ！

「さあ、行くわよ」

「ふん。始めようか」

「^{デュエル}決闘！！」

遊奈

LP 4000

手札 5

Spco

セキュリティ

LP 4000

手札 5

Spco

「先攻は私が貰う、ドロー！」

セキュリティ

手札 5↓6

「私はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

セキュリティ

手札6↓5

ゲート・ブロッカー

DEF2000

うわ、ゲート・ブロッカーだ。

あれって結構ひどいのよね。

守備力は高いわ、SpCは増えないわで厄介なのよね。

でもあれを乗り越えてこそなんだけど。

「私はGN・ガンダムデユナメス深緑の狙撃兵を攻撃表示で召喚」

遊奈

手札6↓5

GN・深緑の狙撃兵

ATK1600

セキュリティ

SpC0↓1

うん、分かってるから。

何も言わないで。

これは少し趣味が行き過ぎただけなの。悪ふざけじゃないの。けっして作者がOO好きなだけっていうわけじゃないの。

きちんと私も好きよ？

だからやっちゃったんだけど・・・。

まあいい子だっことを見せれば納得するわよね？
強さ的な意味で。

「私はカードを一枚伏せて、ターンを終了するわ」

遊奈

手札5↓4

「私のターン、ドロー！」

遊奈

S p c 0

セキュリティ

手札5↓6

S p c 1↓2

「（・・・これは勝ったな）・・・私は手札のアサルト・ガンドッグ、華麗なる潜入工作員、ガード・ドッグを墓地に送り、モニタージュ・ドラゴンを特殊召喚する！ モンタージュ・ドラゴンの攻撃力は、この時墓地に送ったモンスターのレベル×300ポイントの数値になる！」

セキュリティ

手札6↓2

モンタージュ・ドラゴン

ATK3000

うっわ。

これはひどい。

・・・手札が半分くらい事故ってるのに、どうしろって言うのよ、この状況を。

いや、これをひっくり返すことが出来たら、最高なんだけどさ。

「モンタージュ・ドラゴンで、貴様のモンスターに攻撃！ パワー・コラージュ！」

「くっ、リバースカード、オープン！ 和睦の使者！ このターン、私のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘で受けるダメージも0になる！」

「ちっ。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

セキュリティ

手札2↓1

ここであの子が来なかったら、ぶっちゃけ終わったわね。

さて来てくれることを祈っておこうかな。

「私のターン・・・ドロー！」

遊奈

手札4↓5

Sp c 0

セキュリティ

Sp c 2↓3

あの子が来てくれることを信じて、思い切りドローする。
振りぬいた手に掴んでいるカードを見ると・・・。

来た！

「私はGN・蒼穹の粒機兵^{ガンダムエクシア}を攻撃表示で召喚！」

遊奈

手札5↓4

GN・蒼穹の粒機兵

ATK1900

「そして自分フィールド上にGNと名のついたモンスターが存在することにより、GN・^{オーガンダム}原初の粒機兵を特殊召喚する！」

遊奈

手札4↓3

GN・原初の粒機兵

ATK1000

この二体が、私のエースを呼んでくれる！

「二つの想いが束ねられた時、新たな剣が舞い降りる！
コンタクト融合！ 来て、GN・蒼穹の^{ダブルオーガンダム}双粒機兵！！」

GN・蒼穹の双粒機兵

ATK2400

・・・かっこいいなあ。

すごいね、これが生ダブルオーかー。私GJ、超GJ。
ソリッドビジョンもいい味だしてるね。

・・・ちよつと舞い上がってたわね。

さて、何もしなかったところを見るに、あの伏せカードは攻撃反応型かな？

それはそれで好都合だわ。

「GN・深緑の狙撃兵の効果発動！ 自分フィールド上にこのカード以外のGNと名のついたモンスターが存在する場合、相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる！」

「馬鹿な！」

「さらに、GN・蒼穹の双粒機兵の効果を発動！ 手札を一枚墓地に送ることで、相手のカードを一枚破壊できる！ 私が破壊するのは、モンタージュ・ドラゴン！ スプレッド・ライフル」

ダブルオーが放った拡散射撃が、モンタージュ・ドラゴンを吹き飛ばした。

あとはゲート・ブロッカーのみ。

でも若干攻撃力が届かない……。

！！

この方法なら、このターンで終わる！

「私はSp・セイム・スピードを発動！ このターン、私のスピードカウンターは、相手のスピードカウンターと同じになる！ そしてエンドフェイズ時に0になる」

遊奈

手札3↓2

SpCO↓3

これで発動条件はそろった。

最後の効果も、私は元々0だったから関係ないし。

そもそもこのターンで終わらせるから、まったくの無意味だわ。

「さらに私はS p「セカンド・チャンス」を発動！ 自分のスピードカウンターが2以上ある時、スピードカウンターを全て取り除き、自分のモンスターを一体手札に戻すことで、このターン自分のモンスター一体は二回攻撃できる！」

遊奈

手札2↓1

「なんだと!?!」

「私は、デュナメスを手札に戻して、ダブルオーを選択するわ！」

遊奈

手札1↓2

これで準備は万端！

「ダブルオーでゲート・ブロッカーを攻撃！ ツインランス！」

ダブルオーがその手に持った剣——GNソード？で、ゲート・ブロッカーを切り裂いた。
これでもう壁はいない！

「ダブルオーで、ダイレクトアタック！」

「私のライフは残るぞ！」

「いいえ、あなたはこのターンで終わりよ。手札のGN・深緑の狙撃兵の効果を発動！ 自分のGNと名のついたモンスターが戦闘を行う場合、このカードを墓地に送ることで戦闘を行うモンスターの攻撃力は1600ポイントアップする！」

「馬鹿な!？」

遊奈

手札2↓1

GN・蒼穹の双粒機兵

ATK2400↓4000

「いけえ、ダブルオー！ セカンド・ツインランス！」

「ぐおわーーーーー!!」

ダブルオーの二撃目が、セキュリティに直撃した。

彼のモニターには、DEFEATと表示されスリップしながら停止した。

それを横目で見ながら、颯爽と私は離れていく。

とても爽快だった。

やはりライディング・デュエルは楽しい。最高だ。
風を切りながら、勝利するのは快感だ。

そのまま私は、アジトへと戻っていった。
今度は遊星ともデュエルしたいものね。まる。

三話『サテライトの赤き二条の流星』（後書き）

まあ、これはひどいと言えるものですね。
じゃあオリカ紹介でもしましょうか。

GN・蒼穹の粒機兵（ガンダムエクシア）

効果モンスター

レベル4／光属性／機械族／攻撃力1900／守備力1200

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていればその数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

このカードが戦闘で破壊された時、手札またはデッキから「GN-
エクシアリベア
粒機兵の残骸」を特殊召喚する。

GN・深緑の狙撃兵（ガンダムデュナメス）

レベル4／光属性／機械族／攻撃力1600／守備力1000

効果モンスター

自分フィールド上にこのカード以外の「GN」と名のついたモンスターが存在する場合、一ターンに一度だけ相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる。

自分の「GN」と名のついたモンスターが戦闘を行う場合、このカードを手札から墓地に送ることで戦闘を行うモンスターの攻撃力を1600ポイントアップする。

GN・原初の粒機兵（オーガンダム）

レベル2／光属性／機械族／攻撃力1000／守備力800

チューナー（効果モンスター）

自分フィールド上に「GN」と名のついたモンスターが二体以上存

在する場合、このカードは特殊召喚することができる。
このカードは一ターンに一度まで、戦闘では破壊されない。

GN・蒼穹の双粒機兵（ダブルオーガンダム）

レベル6／光属性／機械族／攻撃力2400／守備力2000

融合・効果モンスター

「GN・蒼穹の粒機兵」＋「GN・原初の粒機兵」

このカードは自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻すことで、エクストラデッキから特殊召喚することが可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

手札のカードを一枚墓地に送ることで、相手フィールド上のカードを一枚破壊することができる。

Sp・セイム・スピード

通常魔法

このカードを発動したターン、自分のスピードカウンターは相手と同じになる。

このカードを発動したターンのエンドフェイズ時、自分のスピードカウンターは0になる。

Sp・セカンド・チャンス

通常魔法

自分のスピードカウンターが2つ以上ある場合に発動することができる。

自分のスピードカウンターを全て取り除き自分のモンスター一体を手札に戻すことで、自分のモンスター一体はこのターン二回攻撃できる。

こんなもんでしょうかね。

遊奈「自分で作っておきながら、これはひどいわね」

デュナメスのノーコスト破壊はけっこう強いと思います。

あとエクシアも切り込み役ができますし、戦闘破壊されても壁が出てきますしね。

個人的にダブルオーはやればできる子だと思いますが、ほどほどにね。

・・・正直、ライザーはどうやって出そう・・・。
困ったな。

遊奈「普通に出せば？」

いや個人的にはちょっと凝りたいし。

遊奈「わがままねー。まあ私もカッコイイ感じで出したいしねー」

gd gd になってきたので、そろそろ終わりますか。

次回『二つ目のオリカ！ エスペリオデツキ』

それではみなさん、次回までごきげんよう。

四話『二つ目のオリカ! エスペリオデツキ』 (前書き)

タイトル通り、今回は二つ目のオリカデツキです。

四話『二つ目のオリカ! エスペリオデッキ』

セキュリティに追われることになった、ラリーの窃盗から数日が経った。

遊星はシティに行くためにD・ホイールの点検を行っている。

私はいえ、オリカで構成したデッキを見ていた。

デュエル中に、あれ? どうやるんだっけ? とか考えてたら時間の無駄じゃない?

だからすぐに動けるようにコンボとか覚えておくのよ。

そんなこんなで暇つぶしをしていたら、ブリッツたちが帰ってきた。見るとどこか不満げだ。

なにかあったのかしら?

「ブリッツ、なにかあったの?」

「え? いや、あったといえばあったが、ないといえばないな」

「煮え切らないわね。はっきり言いなさい!」

「ひっ。いやいやマジでなんもなかったって」

本当かしらね?

そんな風に思っただけと見るけど、目をそらされた。問い詰めようとしたけど、誰かの気配がした。

「よう、ブリッツくん。ここがお前らのアジトか？ いいところに住んでんじゃねえか」

「こんなところ、お前らにゃあ勿体ねえぜ。瓜生の兄貴、この連中をどかして、俺らで住みましょうよ」

「それも悪くないな・・・お。それはD・ホイールか。お前らには無駄なもんだろ？ 代わりに俺がもらってやる」

こいつら・・・人が黙ってたら好き勝手言っ
てぶっ潰そうかしら。

「こ、これは俺達の希望なんだ。お前達になんか、やるかよ！」

「んだと!？」

「ラリー、ここは俺が相手する。お前は下がっているんだ」

「う、うん。分かった」

あ、遊星が怒ってる。

まあ、あんな風に言われたら怒るわよね。

「じゃあ私は見物でも・・・」

「おうおう遊奈ちゃんよお！ 木村様がお前のD・ホイールを貰いに来たぜ！！」

「はあ。ウザイのが来たわ」

今入ってきた奴は木村。

ここ数日前から、私のD・ホイールを奪いに来るやつ。

いつもは例の変態たちが撃退してるんだけど、今日は出かけてるから私が相手しないといけない。

憂鬱だわ。

「どうしたよ、そんなツラしてよ！ とうとう観念したか？」

「そうね。毎日来られてもうるさいし、ここで決着つけないとね」

「へん、そうこねえとな！ 俺とデュエルして、俺が勝ったらそいつは貰う！ ただし俺が負けたら、一切ここにやあ近づかない！」

「それでいいわ」

ほんとに面倒だわ。

ラリーたちが心配そうな顔してるけど、私の実力を忘れたのかしら？

「じゃあ・・・」

「始めようか」

「^{デュエル}決闘！！」

遊奈

LP 4000

手札 5

木村

LP 4000

手札 5

「俺の先攻、ドロー！」

木村

手札 5↓6

何が来るのかしらね。

「俺は暗黒界の狂王ブロンを攻撃表示で召喚！ ターンエンド！」

木村

手札 6↓5

暗黒界の狂王ブロン

ATK 1800

あれ、カード伏せないの？
いや簡単に勝たせてくれるならそれでいいけど・・・。

「私のターン、ドロー」

遊奈

手札6↓5

ううん、まあまあね。

それほど悪くはないけど、魔法・罠がないわね。
ま、いいかな。

「私はエスペリオ・ネーサを守備表示で召喚。ターンエンド」

遊奈

手札6↓5

エスペリオ・ネーサ

DEF800

身を丸めた小悪魔っぽい女の子が現れた。

うん、可愛い。

けど次のターン、大丈夫かな？

この子はリクルーターだから一応は安心はできるけど・・・。

「俺のターン、ドロー！」

木村

手札5↓6

「俺は永続魔法、暗黒界の取引を発動！ お互いにカードを一枚ドロ―し、その後カードを一枚墓地に送る！」

遊奈5↓6↓5

木村4↓5↓4

まずい。

暗黒界の猛攻が始まる！

「手札から墓地に送られたことにより、暗黒界の武神ゴールドから特殊召喚！」

暗黒界の武神ゴールド

ATK2300

うわ・・・。

自分で捨てたのに戻ってくるとか、ひどすぎるわ。
なにあのインチキ効果。

「俺はゴールドでエスペリオ・ネーサに攻撃！」

ゴールドによってネーサが破壊された。

ああ・・・ネーサが半泣きで消えていった。

けど、この子は他のリクルーターとは違うのよ！

「ネーサの効果発動！ この子が戦闘破壊された場合、デッキから同名のカードを特殊召喚する！」

エスペリオ・ネーサ

DEF800

他のリクルーターと違うところ。

それは表示形式を選べること。

基本、リクルーターは攻撃表示か、守備表示で特殊召喚される。けれどこの子はその前提を覆す・・・！

その分、能力値は低いんだけどさ。

「ちっ。攻撃しても無駄か。なら、このままターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！」

遊奈

手札5↓6

この状況をひっくり返せるカード。
お願い・・・来て・・・。

そっと思ってみると・・・。

「来た！ 私のフィールドにエスペリオと名のついたモンスターがいることで、エスペリオ・ヤツサを特殊召喚する！」

遊奈

手札6↓5

エスペリオ・ヤツサ

ATK1600

まだ終わりじゃないよ・・・。
あれ、これ前も言ったような。
多分気のせいだね。

「そして私はチューナーモンスター、エスペリオ・フローターを召喚！」

遊奈

手札5↓4

エスペリオ・フローター

ATK0

これでシンクロができるわ。
このデッキのコンセプトはそれなりの継戦能力を持たせつつ、シンクロさせること！

本当なら、遊星みたいにローレベルシンクロが狙えるんだけど、今回は大きいのが出るわよ！

「レベル3のエスペリオ・ネーサとレベル4のエスペリオ・ヤッサに、レベル1のエスペリオ・フローターをチューニング！」

一輪の輪の中に、七つの星が並ぶ。
それを見ながら、シンクロ口上を口にする。

「暗き闇の底の王者が、深淵に引きずり込む。シンクロ召喚。絶望を抱かせろ、エスペリオ・ジェノサイドキング！」

エスペリオ・ジェノサイドキング
ATK2900

王様が着るような豪華な服装を纏った銀色の悪魔が、私のフィールドに仁王立ちしている。

やはりソリッドビジョンは最高だ。
これを作ったKCは素晴らしい。

「な！ 攻撃力2900だど！？」

「ジェノサイドキングの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地のエスペリオと名のつくモンスターを特殊召喚する！ 私は墓地のエスペリオ・アタッカーを選択する！」

「そんなモンスター、いつの間に!？」

「あんたの暗黒界の取引の効果よ・・・まあ、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃力・守備力は半減し、効果も無効化されるのだけだね」

エスペリオ・アタッカー

ATK1100

でも、攻撃表示でしたのは攻撃させるためじゃないんだけどね。

「そして魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスターを墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する」

「まだ出るのか!？」

遊奈

手札4↓2

「私は二体目のエスペリオ・フローターを特殊召喚！」

「またチューナー・・・ということは！」

「ご名答・・・私はレベル5のエスペリオ・アタッカーにレベル1のエスペリオ・フローターをチューニング！」

今度は一輪の輪に対して、五つの星が現れた。
そして再び、シンクロ口上を口にする。

・・・余談だけど、これが一番苦戦した。
なかなかかっこいいのが浮かばなかったから。

「暗き闇の底で鍛えられし剣が、今ここに！ シンクロ召喚！
エスペリオ・ウォリアー！」

エスペリオ・ウォリアー

ATK2400

二体目のエスペリオのシンクロモンスター。
現実で言うなら、インフェルニティのデッキコンセプトに似てるかもしれない。

圧倒的な展開力とともにシンクロを連打。

・・・うん、似てるわ。

「馬鹿な・・・二体目のシンクロモンスター・・・！」

「挑む相手を間違えているのよ、あんた」

こっちはチートカード群byミカエルよ？
主人公補正とか、あんなチートがないのに、勝てるわけじゃないじゃない。

「バトル・・・ジェノサイドキングで、ゴールドを攻撃。ジェノサイド・バーン！」

「くう！」

木村

LP4000↓3400

ジェノサイドキングの放った銀色のビーム的なものが、ゴールドを破壊する。

門とかがないとそれなりの打点のモンスターでしかないわ。
バックがないからなおさらね。

「エスペリオ・ウォリアーで、ブロンに攻撃。そしてこの時、エスペリオ・ウォリアーの効果発動！ このカードが攻撃する時、墓地のエスペリオと名のついたモンスターを除外することで、そのモンスターの攻撃力をエスペリオ・ウォリアーに加える！ 私が除外するのは、エスペリオ・アタッカー！」

エスペリオ・ウォリアー

ATK2400↓4600

「なんだ、そのふざけた効果は!？」

「悪く思わないでね。エスペリオン・スラッシュ！」

「ぬああーーーーー!」

木村

LP 3400↓600

うう、ぎりぎり残っちゃった。

こういう時って結構怖いよね。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札 2↓1

「俺のターン、ドロ」

木村

手札 4↓5

「来た! 俺は暗黒界の取引の効果発動! お互いに手札を一枚捨てて、一枚ドロだ」

遊奈

手札 1 ↓ 0 ↓ 1

木村

手札 5 ↓ 4 ↓ 5

ニヤリと、木村が笑った。あの顔はきつとキーカードを引いたわね。

「墓地に送られた暗黒界の武神ゴルドは特殊召喚できる」

暗黒界の武神ゴルド

ATK 2300

「そして永続魔法、一族の結束を発動！」

木村

手札 5 ↓ 4

暗黒界の武神ゴルド

ATK 2300 ↓ 3100

攻撃力がジェノサイドキングを上回った！？

でも、私の伏せカードは聖なるバリアーミラーフォースー。

これで、あのインチキ野郎もイチコロよ！

「さらに暗黒界の雷を発動！」

あ、やば。

ミラフォが……………。

「手札を一枚墓地に送り、その伏せカードを破壊する！」

木村

手札4↓2

あー、ミラフォが。

でも一応はまだ対策はあるんだけどさ。

ていうかさっき、取引の効果で引いたんだけども。

「これで締めだ。ライトニング・ボルテックスを発動だ！」

木村

手札2↓0

ぎゃあ！

これはひどいわ。

一発で状況が。

「ゴルドでダイレクトアタックだ！」

「うぐう」

遊奈

LP4000↓900

「俺はこれでターンエンドだ。次で勝負が決まるなあ、遊奈ちゃんよ？」

まだ大丈夫。

これ以上出てきたらやばかったけど、これで打ち止めなら勝機は十分以上にあるわ！

「これが私のラストターンね、ドロー！」

遊奈

手札1↓2

ふっ、私の勝ちね。

運命は私に味方したわ。

「私はエスペリオ・コスタを召喚。そして、エスペリオ・コスタの効果を発動。墓地のレベル3以下のエスペリオと名のつくモンスター11体を特殊召喚」

遊奈

手札2↓1

エスペリオ・コスタ

ATK700

「私は、墓地のエスペリオ・フローターを特殊召喚！」

エスペリオ・フローター

ATK0

「そして自分フィールドにエスペリオと名のつくモンスターが存在することにより、エスペリオ・ヤッサを特殊召喚！」

遊奈

手札1↓0

エスペリオ・ヤッサ

ATK1600

これがこのデュエルでの最後のシンクロ。
呼ぶのはこのデッキでのエースモンスター！

「レベル3のエスペリオ・コスタとレベル4のエスペリオ・ヤッサに、レベル1のエスペリオ・フローターをチューニング！」

一輪の輪の中で、七つの星が一行に並ぶ。

そして私はその光景を見ながらシンクロ口上を口にする。

「暗き闇の底より、大なる竜が飛び立つ。其は黒き翼なり。シンクロ召喚。飛翔せよ、エスペリオ・フライング・ドラゴン！」

エスペリオ・フライング・ドラゴン
ATK3000

現れたのは黒い竜。

色の深さでいえば、真紅眼の黒竜よりも黒い。

その姿は、どことなく遊星が持っていたスターダスト・ドラゴンと似ている。

つまり、何が言いたいかと言えば、

「ふつくしい………」

「おお………」

こんなところだろう。

対戦相手の木村でさえ感嘆している。

でも見とれてるのを邪魔するみたいで悪いけど、この子の能力は酷

いよ？

「エスペリオ・フライングの効果を発動するわ。一ターンに一度、墓地のエスペリオと名のつくカードを三枚まで除外し、除外した枚数だけフィールド上のカードを持ち主の手札に戻すことができる」

「バウンスだと！？」

「墓地のエスペリオ・フロッターを除外して、あんたのゴールドを手札に戻す」

これで木村のフィールドには暗黒界の取引だけ。
壁もない。

あとは攻撃するだけね。

「ちよっとてこずったわね。エスペリオ・フライング・ドラゴンで、ダイレクトアタック。スカイ・ブラスト！」

木村

LP600↓0

エスペリオ・フライング・ドラゴンの口から放たれた黒い衝撃波が、木村に直撃した。

「……いや比喻よ？」

闇のデュエルじゃないんだからさ。

それにしても、なんか私はこっちよりもGNデッキもといダブルオ

ーデッキの方が使いやすかったわ。
なんでかしら？

私がダブルオー厨だから、ってそんなに厨でもないんだけど。

とりあえず遊星の方は見たらタイミングが良かったのか、ちょうどデュエルは終わっていた。

てかあの台詞ってジャックのじゃない。

あれ、気にいってるのかしら？

そうそう、あのあと木村はもう会わないから写真撮ろうと言ってきたので撮った。といた。

遊星にひつついたらなんか顔が赤かった。

さっきのデュエルでの興奮が収まっていなかったのだろうか？

デュエルって興奮しちゃうよね、特に逆転した時とかさ。

そんなことを考えていたら全員にため息つかれた。

一体なんだって言うのかしらね。

四話『二つ目のオリカ! エスペリオデッキ』(後書き)

どうでしたでしょうか、今回のオリカは？

個人的にはこっちよりも、ダブルオーデッキの方が好きなんですが。

次回は簡単な設定です。

遊奈はどんな感じの人物なのかっていうのを適当に書きます。

遊奈「ちょっと(怒)?」

まあまあいいじゃない、そんなん気にしないだろ？

遊奈「まあそんなんだけど………ねえ？」

しっかり書けと？

ならスリーサイズまで書くけど？

遊奈「……………」

あ、黙った。

じゃ、適当にやってもいいか。

それでは次回『設定1』

皆様、次の機会まで、ごきげんよう！

遊奈「設定1ってタイトルはどうかと思うな」

設定（前書き）

今回は設定DEATH！

・・・・・・ではなく設定です。

設定

瀬川遊奈

年齢…18歳（遊星と同年）

容姿…白髪赤目（アルビノでは無い）の美女

余談ながら作者は白髪キャラが好き

性格…さっぱりして明るい性格。あと鈍感。他人のことには鋭い、でも自分のことには鈍い。つまり鈍感（大事なことなので二回言いました）

身長…167cm

体重…ヒ・ミ・ツ

スリーサイズ…これもヒミツ……。けどあえて言うならスタイルは良いわ。あと巨乳ね。アキほどじゃないけど。

使用デッキ…代行天使（ただしもう使わない？）・ダブルオーデッキ（GNデッキとも呼ぶ）・エスペリオデッキ（展開次第では無くなる？）

オリカ紹介

既出のダブルオー系オリカについては三話参照を願います

エスペリオ系列

エスペリオ・ネーサ

効果モンスター

レベル3／闇属性／悪魔族／攻撃力1200／守備力800

このカードが戦闘で破壊された場合、手札またはデッキから「エスペリオ・ネーサ」1体を特殊召喚する。

エスペリオ・ヤッサ

効果モンスター

レベル4／闇属性／悪魔族／攻撃力1600／守備力1000

自分フィールド上に「エスペリオ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは特殊召喚できる。

エスペリオ・フローター

チューナー（効果モンスター）

レベル1／闇属性／悪魔族／攻撃力0／守備力0

このカードは戦闘では破壊されない。

自分フィールド上に「エスペリオ」と名のついたモンスターが存在し、このカードが特殊召喚に成功した時、自分はデッキからカードを一枚ドローする。

正直この効果は一度も使いませんでした。
要反省ですね。まる。

エスペリオ・ジェノサイドキング

シンクロ・効果モンスター

レベル8／闇属性／悪魔族／攻撃力2900／守備力2000

闇属性チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エスペリオ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は元々の数値の半分になる。

エスペリオ・アタッカー

効果モンスター

レベル5／闇属性／悪魔族／攻撃力2200／守備力1200

このカードのアドバンス召喚に成功した時、このカードの攻撃力はリリースしたモンスターのレベルの合計×200ポイントアップする。

………実用性ないな、このカード。

エスペリオ・ウォリアー

シンクロ・効果モンスター

レベル6／闇属性／戦士族／攻撃力2400／守備力1500

チューナー＋「エスペリオ」と名のついたモンスター1体以上

このカードが戦闘を行う場合、墓地に存在する「エスペリオ」と名のついたモンスターを除外することで、このカードの攻撃力・守備力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

エスペリオ・コスタ

効果モンスター

レベル3／闇属性／戦士族／攻撃力700／守備力1600

このカードの召喚に成功した時、墓地に存在するレベル3以下の「エスペリオ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚できる。

このカードが破壊される場合、手札のカード一枚を墓地に送ることで破壊を無効に出来る。

エスペリオ・フライング・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

レベル8／闇属性／ドラゴン族／攻撃力3000／守備力2500
闇属性チューナー＋「エスペリオ」と名のついたモンスター1体以上
一ターンに一度、墓地の闇属性モンスターを三体まで除外すること
で、除外した枚数まで相手フィールド上のカードを手札に戻す。
このカードは魔法・罠カードの効果の対象にならない。

……これはやりすぎかな。

まあ欠点を挙げるなら……蘇生とかが出来ないくらいかな。
バックが豊富なら、ほぼ敵なしでしょう。

続いて、D・ホイールの説明……要りますかね？

スカイ・フライヤー

遊奈と愉快的仲間達によって作られたD・ホイール。

遊星号と同じくジャンクパーツによって作られている。

メ蟹ックでお馴染みの遊星も設計・組み立てに参加しているが、諸
事情により遊星号よりもDM仕様になっている。

諸事情には突っ込まない方針で……。

遊星号と同じ赤いボディカラーであり、ハイブリッドタイプでもある。
る。

全体的に遊星号と似ている。

設定（後書き）

どうでしたでしょうか。

なんか書いてて「ぼくのかんがえたさいきょうのかーど」というフリーズがずっと頭の中でぐるぐるしてました。

これが主人公最強モノ、そしてオリカが絡むということなのか・・・！

恐怖・・・！！ 圧倒的恐怖・・・！！

まああほな事は放っておいて、とりあえず次回予告です。

ジャックが所持するスターダスト・ドラゴンを取り返すために、シテイへと行くことを決意する遊星。

セキュリティへのハッキングを行い、唯一の通過経路を見つける！

しかしそこを通るには五分の猶予しかなく・・・！！

さらに運悪く以前戦った牛尾とセキュリティの一人に見つかり・・・！

デュエルには勝ったものの、遊星は間に合わず、流れ来る廃棄品に呑み込まれる・・・！！

遊星は無事に帰ってこれるのか・・・！！

遊星「遊星・・・生きていてくれ・・・！！」

五話『駆け抜ける遊星! 想いは共に』 (前書き)

今回はシティ突入です。

基本、拙作は遊奈の一人称で進める予定ですが、他の人物の一人称または三人称で進めるのでもいいかなーとも思っています。よって時々、そのようになると思います。

それでは・・・どうぞ。

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』

諸君、あれから数日が経った。
あれからっていつからだ？
そんなもの言える訳ないだろう！

こほん、すまないね。少々取り乱したようだ。
改めて朝の挨拶、即ち『おはよう』を「「おはようございまーす、
姫！」」挨拶はすでに終わっている！！
私語は慎め！

「遊奈、朝飯が出来たようだが・・・」

「え！ 今行く！」

諸君、続きは・・・・・・そうだな、WEBで。

これが瀬川遊奈の一日の、始まり・・・・・・・・・・！

「変なナレーションを流すな！」

「・・・・・・・・遊奈？」

「やめて！ そんな可哀相なものを見るような目で見ないで！」

「大丈夫だ、遊奈。たとえば遊奈がどんなことになっても俺は受け止

めてみせる」

その優しさが痛い!?

※※※

時間は飛んで夜。

遊星のシティ進入作戦までそろそろね。
命名は私よ。

さてそろそろ廃棄物の流出が止まる頃ね。

え？ 何が始まるのかって？
そりゃあナニに・・・て遊星、そんなに見ないで。
冗談だってば・・・。

「んんっ。さて遊星、出発よ。準備は？」

「大丈夫だ。遊奈も、本当に良いのか？」

「へーきよ。そっちこそ、間に合わなかったとかいう事にならないようにしなさいよ」

私たちの労力が無駄になるじゃない。

・・・・・・そろそろ行かないとね。

「遊星！」

「ああ」

言葉を交し合い、D・ホイールを走らせる。

今回の目的は、ただ遊星を無事にシティに到着させること。
ただ、それだけ。

本来なら一人でも大丈夫だと思うけど、念には念を押して私も途中で
まで一緒に行くことになった。

ていうか、私がついていくことにした。

いやなんとなく・・・・・・妙な胸騒ぎがしてね。

・・・・・・あれ、これフラグ？

変なフラグ立てちゃった？

・・・・・・いやいやねー、もしかしたらあるかも。

ないよね？

※※※

私たちは今、廃棄物処理施設に来ている。

この地下からシティに伸びている廃棄物を流し込むパイプが通っ

ている。

パイプとは言ってもかなりデカイけれど・・・。

・・・？

今、後ろからセキュリティのサイレンが聞こえたような・・・。

「待ちやがれ、屑野郎もおー！」

本当にフラグだったんだ、あれ。

・・・って今はそんなこと言ってる場合じゃなくて！

「遊星！」

「分かってる。遊奈、ここは任せてもいいか？」

「モチよ。さっさと行きなさい」

遊星はひとつ頷くと、D・ホイールを加速させる。
そのまま夜の闇に消えていった。

「待ちやがれ！」

「あんたこそ待ちなさい」

言葉とともにD・ホイールをぶつける。

・・・が巧みに避けられてしまった。

意外と上手い操縦に目を瞠っていると、横合いから衝撃が来た。

「ふん、久しぶりだな。貴様とあの男のお陰で、上からの私と牛尾への信用が薄くなってしまった。私怨で悪いが、私とデュエルしてもらおうぞ」

「あんたはあの時の・・・」

思い出されるのはラリー―窃盗事件の時に追いかけてきたセキュリティの男だ。

まさかこれがフラグ・・・！？

あ、もちろん悪い意味のね。

「牛尾！ 先に行け！」

「助かるぜ、竹虎！」

どうやらこのセキュリティの男は竹虎という名らしい。

・・・で、そうじゃない！

あの牛尾という男が加速していく。

私が止めないといけないのに・・・。

「待ちなさい、あんたは私が足止めを・・・」

「いいや、貴様とデュエルするのはこの私だ。フィールド魔法、スピード・ワールド。強制発動！」

『スピード・ワールド、セット・オン。パイロットモード・・・マニュアル』

あ、マニュアルのままだ・・・。
でもさっさと終わらせるためにはこれでいいかな？

「ふん、貴様がマニュアルだろうが、私には関係ない。新たに得た特殊追跡デッキで打ち倒してくれる！」

「特殊、追跡デッキ・・・」

なんか強そう。
けど、私だって負けないってね。

「さっさと決着つけたいから・・・」

「ふん、忙しい奴だ。いいだろう・・・」

「「決闘！」」
デュエル

遊奈

LP 4000

手札 5

竹虎

LP 4000

手札 5

「私が先攻を貰う！ ドロー！」

竹虎

手札 5↓6

「私はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

竹虎

手札 6↓4

ゲート・ブロッカー

DEF 2000

またあいつか。

けど初手で出されたら厄介だし、なかなかのステータスを持つ壁だから、全くおかしくない選択なのよね。

「私のターン、ドロ」

遊奈

手札5↓6

S p c 0

竹虎

S p c 0↓1

やっぱりゲート・ブロッカーの効果は厄介・・・！
・・・けど手が無いわ。

ここは様子見ね。

「私はGN一明橙の可変機兵ガンダムキュリオスを攻撃表示で召喚」

遊奈

手札6↓5

GN一明橙の可変機兵

A T K 1 5 0 0

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札5↓3

「ふっ、手段がないか？」

「うっさいわね。次のターンから反撃すんのよ」

「ほう、そのチャンスが来るといいがな？ 私のターン、ドロー」

竹虎

手札4↓5

S p c 1↓2

遊奈

S p c 0

ああは言っただけ、流石にこの状況はまずい……。二枚作れたとは言っただけ、あの子がいないとこのデッキはパワー不足だからなあ……。

「私はチューナーモンスター、ジュツテ・ナイトを召喚！」

竹虎

手札5↓4

「チューナー！？ まさか……」

「いかにも・・・レベル4のゲート・ブロッカーにレベル2のジュッテ・ナイトをチューニング！ さあ行くぞ、シンクロ召喚！ ゴヨウ・ガーディアン！」

ゴヨウ・ガーディアン

ATK2800

はわわわ・・・当時の環境を荒らしまくった奴来たー！！
そういえば友達がアニメの方でもゴヨウしてたとか言ってたけど、
こういうことなのー！？

「ふ、これが権力の力！ いけ、ゴヨウ・ガーディアン。奴のモンスターに攻撃だ、ゴヨウ・ラリアット！」

「させない、リバーズカード、オープン！ くず鉄のかかし！ 相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

「防いだか・・・だが、そう来なくてはな。こんなに簡単にやられてもらっては困る」

「・・・くず鉄のかかしは効果発動後、墓地には行かずに再びセツトされる」

なんとか凌いだけど、多分長くは続かない。

キュリオスの攻撃力はそれほど高くない。

それなりの打点を持ったモンスターを出されたら・・・持たない。

「私はこのままターンエンド。さあ、どう足掻く？」

「くっ、むかつく奴ね。私にだって、色んな手はあるのよ！ ドロ
ー！」

遊奈

手札3↓4

S p c 0 ↓ 1

竹虎

S p c 2 ↓ 3

ゲート・ブロッカーがいないお陰で、私のスピード・カウンターが増える。

・・・これじゃあ雀の涙くらいにしか意味は無いけど。

「G N ー蒼穹^{ガンダムエクシア}の粒機兵を攻撃表示で召喚」

遊奈

手札4↓3

G N ー蒼穹の粒機兵

A T K 1 9 0 0

・・・念のためにキュリオスは守備表示にしておこう。

「キュリオスを守備表示にし、ターンエンド」

GN—明橙の可変機兵
DEF1200

「ふ、ははははは！ もう終わりか、万策尽きたか！？」

「うるさいわね！ さっさと進めなさいよ、こっちも急いでんのよ！」

「ふん、うるさい女だ。私のターンだ、ドロ」

遊奈

SpC1↓2

竹虎

手札4↓5

SpC3↓4

「ふ、私はSp—ソニック・バスターを発動！ このカードはスピード・カウンターが四つある時に発動できる！」

竹虎

手札5↓4

「やばい！」

「自分のモンスターを1体選択し、そのモンスターの攻撃力の半分の数値のダメージを、相手ライフに与える！ 私はゴヨウ・ガーディアンを選択！ よって、貴様に1400ポイントのダメージ！」

「ぐうう・・・」

遊奈

LP 4000 ↓ 2600

Sp 2 ↓ 1

この程度なら、まだなんとか・・・！

「ふん、これで終わりと思ったか？ 私は、Sp—ダッシュ・ピルファ—を発動！」

竹虎

手札 4 ↓ 3

「なっ・・・！」

「スピードカウンターが四つ以上ある時、相手の表側守備表示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る。私は、その羽根

つきを貰う」

なんでその呼び方を・・・！
・・・でもそれは悪手ね。

「キュリオスの効果発動！ このカードのコントロールが相手に移ったとき、相手に800ポイントのダメージを与える！」

「馬鹿な・・・！」

竹虎

LP 4000 ↓ 3200

ピンポイントだけど、効果はあるのよね。

ライディングだとそんなに使えないけど、スタンディングだとコントロールを奪う系のカードはそれなりにあるからね。

・・・サポート、ていうか効果を活かすためのカードもあるんだけど。

「猪口才な！ バトルだ、ゴヨウ・ガーディアンで、蒼い貴様に攻撃だ！」

今、思ったんだけど。

なんで普通に名前で呼ばないのかしら・・・。

敵役は主人公側の機体は、仇名（でいいのかな？）で呼ぶのが基本

なの？

ていうか主人公側って私は何言ってるんだ？

「リバーズ、オープン。くず鉄のかかし。攻撃を無効にし、再びセツトする」

「そいつを待っていた。私は奪った羽根つきで、蒼い貴様に攻撃だ」

血迷ったのかしら。

攻撃力ならエクシアの方が上。

ここで仕掛けることに、なんの意味が・・・？

「攻撃力ならエクシアの方が上よ！」

「この瞬間、リバーズカード、オープン。特殊迎撃部隊を発動。相手モンスターの攻撃力・守備力をエンドフェイズまで、自分ワールド上のモンスターの数×500ポイントダウンさせる」

「・・・てことは」

「蒼いヤツの攻撃力は1000ポイントダウンだ！」

GNー蒼穹の粒機兵

ATK1900↓900

まずっ、これが狙い・・・！？

「破壊しろ！」

「させない！ 手札のデュナメスの効果発動！ このカードを墓地に送り、戦闘を行うGNモンスターの攻撃力を1700ポイントアップさせる・・・対象はもちろん、エクシア！」

GN－蒼穹の粒機兵

ATK900↓2600

「なに！」

竹虎

LP3200↓2100

spc4↓3

腰からビームサーベルを引き抜き、切りかかって来たキュリオスを右腕の大剣、GNソードで弾き貫く。

キュリオスはそのまま爆散した。

・・・つかこれって、ソリッドビジョンだよね？
なんか火花散ってるんだけど。

「小癪な奴め。私はこのままターンエンドだ」

小癪と言われても負ける訳にはいかないんだから仕方ないじゃない。
勝って遊星をシティに送らないと・・・。

『遊奈！』

え？ このタイミングで通信する？

ていうか、向こうはパイプの中・・・よね？

しかもデュエル中だし・・・なんでこっちに通信を・・・？

『遊奈、どうやら今日に限って廃棄物処理施設あっちで不都合があったようだ。お陰で遊奈も来れる。こっちに来てくれないか？』

あー、そういうこと。

今なら間に合うからついてこい、と。

良いかもね。

私もシティには興味あったし・・・。

一つ頷くと、そこに込めた意味を遊星は感じ取ったのか、遊星も頷き通信を切った。

切れたのを確認しないままスカイ・フライヤーの進行方向を反転させる。

行く先は処理場の中。

「待て、どこに行こうと言うのだ！」

「・・・流入が遅れるんでしょう？　なら私も遊星の後を追うだけよ」

「行かせると思うのか？」

「さっさと終わらせて、押し通るだけよ！　私のターン、ドロ」

遊奈

手札2↓3

s p c 2↓3

竹虎

s p c 3↓4

くっ、あの子が来ない。

・・・このカードに賭けるしか、ないわ。

「自分のスピードカウンターが2つ以上あることで、私はこのカードを発動することができる・・・S p エンジェル・バトン！　2枚ドロし、手札から1枚墓地に送る」

遊奈

手札3↓2↓4↓3

……自然、笑みが浮かぶ。

この子を引くこの瞬間を、待ち望んでいた。

「自分フィールド上にGNモンスターが存在することで、チューナーモンスター、GN一原初^{オーガンダム}の粒機兵を特殊召喚」

GN一原初の粒機兵

ATK1000

「なっ、チューナーだと!?! 以前はコンタクト融合にしか使っていないはずだ!」

「別に宣言する必要なんてないじゃない」

「……!?!」

馬鹿みたいな顔しちゃって。

別に詐欺とかじゃないんだし、そこまでこつちを睨む必要はないでしょ。

「さあ行くわよ。レベル4のGN一明橙の可変機兵に、レベル2のGN一原初の粒機兵をチューニング!」

背中のGNフェザーを展開させながら消えていくオーガンダム。
放出された粒子の残滓が、二輪の輪となる。

その輪の中にキュリオスが入る。

輪の中のキュリオスが消失し、代わりに四つの星が一行となる。

「夕焼けの翼が蒼天を翔る。新たな力を存分に揮^{ふる}え。シンクロ召喚。GN—明橙^{ガンダムアリオス}の新可変兵！」

GN—明橙の新可変兵
ATK2600

輪を貫いた閃光の中から、オレンジ色の機兵が現れた。
現れた勢いそのままに一回転し、先端が鋭いシールドをゴヨウ・ガーディアンに突きつける。

「ふ、この場で出すからにはエース級かと思ったが、大した事はないさそうではないか。攻撃力が劣っているのに、何が出来る！」

「攻撃力しか見ていないのなら、あんた負けるわよ」

廃棄物を流し込むパイプのある区画までもう少し。
急がないとね。

とりあえず、さっさとこいつを倒さないとね。

「私はGN―紫電ガンダムヴァーチェの重機兵を通常召喚」

GN―紫電の重機兵

ATK1800

「そうか、まだ通常それ召喚が残っていたな・・・しかしそれで、どうするのだろうか?！」

「そう慌てないでよ。このカードが最後の切り札!」

指差すのは、私の場に伏せられた一枚のリバースカード。これは遊星と一緒にカードを拾っているときに見つけた。二枚しか見つからなかったため、二人で一枚ずつにしたのはいい思い出だ。

「早速お披露目しましょうか。リバースカード、オープン。エンジェル・リフト」

「・・・まさか?！」

そう、蘇生させるのはもちろん・・・!

「エンジェル・リフトは墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。私は墓地から、GN―原初の粒機兵を特殊召喚」

「もう一度シンクロか!？」

「そうよ・・・レベル4のGN―紫電の重機兵にレベル2、GN―原初の粒機兵をチューニング」

再びGNフェザーを散らしながら消えるオーガンダム。
残った二つの輪に、勢い良く突っ込むヴァーチェ。

「紫電の稲妻が漆黒を裂く。新たなる力を存分に揮え。シンクロ召喚。GN―紫電^{ガンダムセラヴィー}の重砲機兵！」

GN―紫電の重砲機兵
ATK2600

緑色の閃光から現れたのは、巨砲を携えた紫の機兵。
双肩にも大砲が在る。
ツインアイに光が走る。

「何度言わせる！ そんなものでは私のゴヨウ・ガーディアンには・・・」

「そっちこそ、何回言わせるの？ この子達の真骨頂は、その効果にこそあるのよ！」

百聞は一見に如かずと言うし、見せてやろうじゃない。

ソレスタルビーイングの真の力・・・！

ごめん、私ただの一般人だったわ。

「GN―明橙の新可変兵の効果を発動。自分フィールド上にGNモンスターが2体以上存在すれば、この子の元々の攻撃力は2900になる！」

「馬鹿な、ゴヨウ・ガーディアンは攻撃力を超えてきただ・・・！？」

廃棄物を流すパイプの中に突入した。
本格的に急ぐ必要はないけれど、さっさと決めるにこした事は無いわ。

「アリオスでゴヨウ・ガーディアンに攻撃！ スピア・シールド！」

竹虎

LP2100↓2000

アリオスの鋭いシールドが、ゴヨウ・ガーディアンの胸を貫いた。
その際の微かな衝撃で、竹虎の白バイ型のD―ホイールが揺れる。

「これでとどめっ！ セラヴィーでダイレクトアタック！ GNバ

ズーカ・ハイパーバースト！」

「ぐ、ぐおおおおお！！」

竹虎

LP2000↓0

セラヴィーから放たれた高濃度圧縮粒子を使用した砲撃が、竹虎を呑み込む。

攻撃の余波なのか、思い切り転倒した。

ぶっちゃけ、さっきのは・・・まあ、某魔法少女の○ターライト・ブレイカーに見えなくも無い。

というか、彼からしたらトラウマ級の攻撃だろう。

自分でやっというてなんだが、彼には一応謝っておこう・・・心の中で。

『遊奈！』

「！　びっくりした・・・どうしたの、遊星？」

『今すぐ引き返すんだ！』

どーゆーこと？

別になんともないんだけど・・・。

『俺はなんとかシテイには入ることに成功した・・・だが、今になって廃棄物の流入が始まった。早く引き返すんだ!』

「・・・・・・・・あ」

『どうしたんだ?』

あー、あれか。

目の前には、さっきまではなんか気づかなかったけど、物凄い量の廃棄物が流れてきた。

今、私は、自分の死に場所を知った。

ていうか、マジでこれ、私死ぬんじゃない?

正直、こんなんに呑み込まれて生きていられる訳ないじゃん。

※牛尾さんは普通に生きてました。

なんか、今電波的なものを受信したわ。

それはさておいて、とりあえず言っところかしら。

「・・・・・・・・遊星」

『なんだ?』

「ジャックの目を覚ましてあげなさい。あんたなら・・・それが出来るわ」

『遊奈? 何故、そんな言い方なんだ?』

遊星の声が震えている。遊星の顔が、どこことなく悲痛に歪んでいる。
・・・いや、私の気のせいね。
だけど私は気に留めない。
覚悟が・・・揺らぐから・・・。

「そんな言い方って？」

『何故、そんな自分で見ようとしなにかのような言い方なんだ？』

「決まってるじゃない。あんたなら、きっと出来るからよ」

きっぱりと、これ以上ないってくらい信用と信頼を乗せた言葉。
あと、その他諸々も乗っている気がするけど・・・一番込めたのは
今の二つ。

廃棄物が迫ってきている。

最期に言えるのは、たった一言。

「どこでもあんたの傍に居てあげる・・・遊星」

『ゆ、遊奈ーーーーー!!』

遊星の叫びを聞きながら、私は廃棄物に吞まれた。

・
・
・
遊星
・
・
・
○

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』（後書き）

遊奈「・・・・・・・・」

おや、どうしたのかね？

遊奈「いや、これ私おもくそ死んでない？」

さあー、どうでしょうねー？

遊奈「怪しい。めっちゃ怪しい」

H A H A H A、なんのことやら。

あなたには次回に満足さんの憂鬱を晴らしてもらいますよ。

遊奈「はあ？　どういう意味よ？」

そういえば原作知識ないって設定でしたね。
どうでもいいですけど。

まあ次回のヒントというなら、ダークです。

遊奈「ヒントがダーク？　そして京介の憂鬱？　　どういうことだ、クアンタ。まるで意味が分からんぞ！」

ネタに走りましたね。

そろそろ次回予告、行きましようか。

遊奈「あ、今日は優しい・・・・んっ、えー、廃棄物に吞まれてしまった私。目を覚ましてみれば、そこは見覚えの無い場所。いき

なり声をかけられ振り向けば、そこに居たのは・・・！」

次回、遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう。

第六話『怒れる鬼柳 救いだせ、ダブルオー！』

それではみなさま。

遊奈「次回まで、ごきげんよう！」

遊奈「なんで今回は優しかったの？」

死んでるから。

遊奈「……………え？」

六話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介』《前編》（前書き）

えー、一言。

予告詐欺、第一弾っ・・・！
といってもタイトルだけ詐欺なんです。

それと本編中の鬼柳さんですが、使用するカードがアニメ版と比べてけっこう違っています。一応、インフェルニティもあるよ・・・
（汗）

その理由については、まあ遊奈が本編中で言ってくれています。

とりあえず後は一言だけ。
ゆっくりして言ってね！

六話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 《前編》』

一人の青年が佇んでいる。
その姿に覇気はない。

どこか虚ろな目をしている。

その少年を、遊奈は知っている。

今はセキュリティによって収容所にいると聞いていたのだが、これはどうということなのかと、遊奈は首を傾げた。

遊奈は、彼に手を伸ばそうとするが、見えない壁によって動きが取れなくなった。

何事かと周りを見るが、一切の邪魔などない。

しかし事実として、彼女は身動き一つ、満足に出来ない。

眼前で彼女の知己である青年――鬼柳京介は、何事か呟いている。
遊奈はそれを聞き逃すまいと、耳を傾けた。

「復……した……。そして……。った、チー……。のラスト・
……ルを」

聞き取れたのは、これくらいだった。

如何せん、距離があった。

だがこれほど聞けたなら、ある程度予想できる。

なのに、予想は、所詮は予想でしかない。

彼女は……。何も出来ない。

彼に歩み寄ることすらできないのだから。

悔しくて、ただ彼に近づく・・・そんな些細なことすら出来ない自分に腹が立って、下唇を噛み締める。

唐突に・・・頭上から光が降ってきた。

遊奈を迎えるかのように燦々と輝くそれは・・・まるで地獄の底で途方に暮れていたカンダタのもとに垂れてきた蜘蛛の糸のようで・・・。

だから遊奈が、それに向かって手を伸ばしたのは・・・必然だったのだろうか。

一瞬の眩しさの後、浮遊感が遊奈の体を包み、意識が再び落ちた。

意識が無くなる直前、遊奈は鬼柳と目が合ったような気がしたが・・・

・彼女はそれをはっきりと理解しないまま、目を閉じた。

※※※

目を覚ますと、そこは薄暗い部屋だった。

中世の貴族・・・と言わずとも、金持ちの屋敷の食堂のような部屋だ。

遊奈は、どうやら部屋に持ち込まれたのだろう長椅子の上で目を覚ました。

上体を起こすと、奥の方にこちらに背を向けている男たちの姿が見えた。

遊奈が起きたのを感じたのか、奥の方でたむろしていた三人が、遊奈へと振り返った。

「目覚めたか、四人目のダークシグナーよ」

初めに口を開いたのは、真ん中の長身で、色素が抜け落ちたような白髪の男だった。

他の二人はフードを深く被っているため、顔が見えない。

「……ダークシグナーってなに？」

今まで聞いたこともない呼ばれ方に頭に？マークを浮かべて問う遊奈。

……とはいえ前世では、その呼び方をされる人物がこういった存在なのか、彼女は知っているのだが。

「そうだな、説明をしようか。まずダークシグナーというのは5000年周期で、憎き赤き竜の手先であるシグナーと戦う存在のことだ。そして我らは死の神によって、邪神の代わりに戦うことで仮初の命を得ている。ここまでは理解したな？」

状況をあまり理解していない遊奈に対して、長身の男――ルドガーは分かりやすく説明をした。

遊奈はルドガーは、見た目そのままの人物ではないと判断した。

だが、遊奈は、彼のことはまだ知らない。

どうやら言動や感じる風格を鑑みるに、おそらく彼がダークシグナ

ーのリーダー格なのだろうと当たりをつけた。
そしてそれは外れてはいない。

「とりあえずは、まあ理解したわ。けど今私たちがダークシグナーとして存在するということは、つまりはその5000年周期の戦いが、もう始まると言うのかしら？」

「ふむ、なかなか聡明だな。鬼柳が味方にいて役に立つと言うのも、頷けると言うものだ」

「えっ！ 京介もダークシグナーなの！？」

ルドガーの言葉に、驚愕を禁じ得ないといった様子で瞠目する遊奈。ルドガーの横に立つ男が、愉快そうに肩を震わせながらフードをはずす。

その顔は紛れもなく、かつての友であり。
だが今は、かつて見たことがない、怒りに顔が歪んでいた。

「くくっ、そうだ遊奈。お前たちの保身のためにセキュリティに売られた、哀れな男がダークシグナーとなって蘇ったのさ！」

「ま、待って京介！ あれは誤解なの！」

「はっ、誤解ねえ。それも俺を売るために学んだ言葉の選び方か？
だが、もうそんなもんで騙される俺じゃねえぞ」

「だから誤解なんだって！ 私の話を聞いてよ、京介！」

自分をセキユリティに売った（と鬼柳は思い込んでいる）あの時のメンバーの一人である遊奈を前にして、激情を抑えきれずにいる鬼柳。

そしてその鬼柳の誤解を解こうと、悲痛とさえ言える声色で必死に説得しようとする遊奈。

互いに視線は交差しているが、その想いはまるで正反対なものだった。

「……ルドガー。こいつに先輩として、ダークシグナー流の戦い方を教えるが……構わないよな？」

「……好きにするがいい」

「！」

鬼柳の問いをあっさりと承諾するルドガー。

おそらくはここで、真に使えるか否かを見極めるのだろう。

やってやろうではないかと遊奈は腹をくくる。

自分は不本意ながらサテライトの姫などと呼ばれていた。

ならば、サテライトの出身者に勝てない道理などないだろう。なぜなら彼女は、その称号に足る実力を持っているのだから。

「なら、始めようか、遊奈あ！ 闇のデュエルをなあ！」

宣言とともに遊奈と鬼柳を中心に、円状に紫色の炎が迸る。
まるで牢獄のように、二人を閉じ込める檻のように、ごうごうと燃え立つ。

「・・・京介、あんたに勝てばいいのね？」

「勝てるもんならな、裏切り者お！」

「「・・・決闘！」」
デュエル

遊奈

LP 4000

手札 5

鬼柳

LP 4000

手札 5

このデュエルで、まずは京介の目を覚まさせるしかないわ。
手っ取り早く話を聞かせるには、このデュエルに勝つしかない！

「私の先攻、ドロー！」

遊奈

手札 5↓6

この子たちじゃ、あの京介には届かない。
一気にいけないのは、齒がゆいな。

「GNⅠ紫電の重機兵を攻撃表示で召喚」

遊奈

手札6↓5

GNⅠ紫電の重機兵

ATK1800

この子なら、ある程度は保つわ。

・・・本当はエクシアがいいんだけども。

「カードを三枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札5↓2

「はっ、自分を守る準備だけはいいいんだな、遊奈よお！」

「そんなことはっ」

「俺のターン、ドロー」

鬼柳

手札6↓5

話、聞いてよ……。

どうして……そんな冷たい目なの。

「インフェルニティ・ビーストを攻撃表示で召喚し、カードを二枚伏せてターンエンド」

鬼柳

手札6↓3

インフェルニティ・ビースト

ATK1600

インフェルニティ……それが京介の新たな力。

効果は、それほど覚えてはいない。

そして、込められた思いも分からない。

ただひとつ分かるのは、このデュエル……負けられない！

「私のターン……ドロー！」

遊奈

手札2↓3

……来ない。

いや、いつまでもあの子に頼ってちゃダメよね。

ここは私のプレイングで、上手く動かさないと。

「私はGN-1明橙の可変機兵を守備表示で召喚」

遊奈

手札3↓2

GN-1明橙の可変機兵

DEF1200

守りはこれくらいかな。

あとはリバースカードをどのタイミングで、どう使うか。

少しでもミスしたら、痛いしっぺ返しを食らう。

京介は、それほど強敵だから・・・。

「ヴァーチェで、インフェルニティ・ビーストに攻撃！」

「リバースオープン！ 永続罠、デプス・アミュレットオ！」

「カウンター罠、発動！ 戦術予報士の読み！」

確かあの罠は手札を一枚捨てて攻撃を無効にする罠だったはず。
あれはここで倒しておかないと・・・私の勘が、警告してきている。

「このカードは自分フィールド上にGNモンスターが居るときに発動できる。相手の魔法・罠の発動を無効にして破壊する！ さあ、

コストとして手札一枚を捨てなさい」

「ちっ」

鬼柳

LP 4000↓3800

手札 3↓2

「くくっ、今使ってよかったのかよ？」

「・・・その子は倒しておいた方が、いいと判断したからね」

「ふん、そうかよ俺のターンだ、ドロ」

鬼柳

手札 2↓3

「インフェルニティ・リローダーを攻撃表示で召喚。さらに魔法カード、強制転移を発動」

鬼柳

手札 3↓1

インフェルニティ・リローダー

ATK 900

あっるえー？

なんでこんなガチカードを京介が・・・。

って最初に会った時に渡してたような。

ということは、今もまだ私との絆は・・・残っているの？

「私はキュリオスを選択するわ」

「どうだ遊奈。仲間を、むぎむぎと敵に引き渡す気分はよ！」

「・・・生憎と、私は敵に渡したなんて思っていないし、むしろそれは悪手よ、京介」

そう、キュリオスは敵陣についてこそ痛みがあるカード。

それを教えてあげる。

あの、分からず屋の頭デツカチに。

「そしてキュリオスのモンスター効果発動！ このカードのコントロールが相手に渡った時、相手ライフに800ポイントのダメージを与える」

「ぐおおお・・・！」

鬼柳

LP 3800 ↓ 3000

このデュエル・・・もしかしたら、ダメージが現実になっているの！？

「京介！」

「来るんじゃないよ、裏切り者が・・・コントロールが変わった時に発動する効果か。まさしく仲間を売る貴様らに相応しいカードだな！」

・・・ら？

もしかして京介は、私だけでなく遊星たちにも、その憎しみを向けているの？

・・・なら、やっぱりここで止めないと。

京介と遊星たちが、こんなことをするのは見逃せない・・・自分勝手と言われようと、これは譲れない！

「京介・・・もう、言葉で分かってとは言わない。ここまで来たら、デュエルで話を聞かせる！」

「強行手段かよ。だが、それが一番分かりやすいよなあ！」

京介は、さっきのダメージをもとめせずに、立っている。
・・・どこかそれが、意地を張っているように見えたのは、きっと気のせいなのだろう。

「魔法カード、早すぎた埋葬を発動。ライフを800払い、墓地のインフェルニティ・デーモンを特殊召喚する」

鬼柳

手札1↓0

LP3000↓2200

インフェルニティ・デーモン

ATK1800

また・・・！

あれらのカードを持ってるってことは、まだ希望はあるわ。
強制転移も、早すぎた埋葬も、私が交換したカード・・・！

だけど・・・違和感がある・・・。

本来なら、入れるはずの無いカード。

なのに、無理やり入れたみたいな感じ。

「インフェルニティ・デーモンの効果発動。手札が0の時にこいつが特殊召喚された時、デッキからインフェルニティと名のつくカードを手札に加える・・・俺は、インフェルニティ・ドワーフを手札に加えるぜ」

鬼柳

手札0↓1

・・・ガンじゃなくて、ドワーフ？

まだ持っていないか、それともまた別の思惑があって・・・？

「てめえのモンスターで、インフェルニティ・リローダーに攻撃」

GN－明橙の可変機兵

ATK1500

「ああああっ！」

遊奈

LP4000↓3400

痛う・・・これが、闇のデュエル。

半端じゃなく痛い・・・！

「ターンエンドだ」

「う・・・私のターン・・・ドロ」

遊奈

手札2↓3

まだ600しかライフは減っていないのに、これほどの衝撃。
危険だわ・・・お互いにとっても・・・。

「私はヴァーチェで、キュリオスに攻撃」

「ぐおおお・・・」

鬼柳

LP2200↓1900

よし、僅かにだけどライフを削れている・・・！
このまま地道に押していけば、勝てる。

「私はこのままターンを終了するわ」

「俺のターン、ドロー」

鬼柳

手札1↓2

「・・・くくくく、ひゃーはっはっはっはあ！！」

「・・・何を笑っているの？」

「いやあ、ここでこいつを引くとは思ってもいなくてよお。覚悟しろよ、遊奈？」

直感で理解した。
まずい、と。

何かを出す気だが、確実に京介はこの状況を打開するためのキーカードを出すつもりだ。

インフェルニティを使うに当たってはシンクロが基本だ。なのにチューナーなどいない。

つまり・・・切り札は上級モンスター？

「リバースカード、オープン！ リビングデッドの呼び声！ 墓地のモンスターを特殊召喚する！」

また私が渡したカード・・・！
なぜ京介はこうも私と繋がりがあるカードを使うの？
憎んでいるはずなのに・・・。

「俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを特殊召喚。そしてインフェルニティ・デーモンと、インフェルニティ・ネクロマンサーをリリースし、DT ナイトメア・ハンドを召喚！」

鬼柳

手札2↓1

DT ナイトメア・ハンド

ATK0

ダーク・・・チューナー・・・？

なにそれ、聞いたこと無いわ。

しかも、攻撃力が0でどうするの？

「DT ナイトメア・ハンドが召喚された時、手札からレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、インフェルニティ・ドワーフ！」

鬼柳

手札1↓0

インフェルニティ・ドワーフ

ATK800

「レベル2のインフェルニティ・ドワーフに、レベル10のDTナイトメア・ハンドをダークチューニング！」

「ダークチューニング!?」

なにそれ、今まで聞いたことも無いわ。
しかも・・・ドワーフの中に星が埋まった・・・。

「漆黒の帳下りし時、冥府の瞳は開かれる。舞い降りろ闇よ！
ダークシンクロ！ いでよ、ワンハドレッド・アイ・ドラゴン！」

ワンハドレッド・アイ・ドラゴン

ATK3000

「・・・でかい」

闇を思わせる漆黒の楕円から現れたのは、ドラゴンというよりは悪魔と形容した方がむしろ相応しいと言えるほどに、禍々しい存在だった。

その威圧感は、まさしくこの巨体から発せられるほどに圧倒的だった。

「ひやはははあ！　これでめえの命も風前の灯ってやつだなあ！」

「待て鬼柳、そいつは殺すな。我らの同胞なのだぞ」

「消えちまいな、遊奈。ワンハドレッド・アイ・ドラゴンで、そのデカブツに攻撃だ。インフィニティ・サイト・ストリーム！」

「鬼柳・・・！　・・・聞こえていないのか？」

攻撃表示にしているヴァーチェではなく、リローダーに？
・・・けど、京介が無駄なことをするわけがない・・・！
きつと、なにかある。

あと、ルドガーがなにか言ってるけど・・・なにかしら？

「やらせない！　速攻魔法発動、月の書！」

「この瞬間、ワンハドレッド・アイ・ドラゴンの効果発動。墓地の

闇属性モンスターの効果を得る。俺が選択するのはインフェルニティ・ビースト！」

確か、ビーストの効果は手札が0の時、このカードが攻撃をする時に相手は魔法・罠を発動出来なくなる効果。つまり・・・。

「月の書は、発動できない・・・！」

「吹き飛ばし！」

「きゃあああああ！！！」

遊奈

LP3400↓2200

くう・・・。

痛あ・・・立とうとしても、立てない。

全身には鈍痛が走って、視界がぼやける。

背中の方では、紫の炎が燃え続けている。

「どうした。立てよ。立って、無様なダンスでも踊り続けろよ、遊奈」

「ダンスは、好きだけど・・・無様なダンスは・・・嫌いだわ」

ゆっくり立ち上がる。

痛い、けどのんびり座ってもいられない。

だってこの頭デッカチに、本当の事を教えてあげないといけないから。

「・・・ふん、ターンエンド」

京介が鼻で笑ってるけど、どこか無理してるように見えるのは、気のせいかな。

・・・それにこんな京介は見たくない。

だから私は・・・勝ってみせる。

「私のターン、ドロー！」

引いたカードを横目で見ながら、私は不敵に笑った。

六話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 《前編》』（後書き）

妙なところで切りましたが、他に切りようが無かったので勘弁してくださいね。

次回についてですが、遊奈の新たな切り札で決着をつけます。
楽しみにしてください。

次回、七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 《後編》』
デュエル、スタンバイ！

正直ここから勝てる気がしないのは・・・私だけでしょうか？

七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 』《後編》（前書き）

予告どおり、今回は遊奈の新たなエースが登場です。

・・・・・・・・ライザーじゃないよ？

それと今回をもって（今更）、原作が崩壊しそうです。

個人的には今回みたいな展開は悪くないと思います。

・・・個人的には。

あとダークシンクロモンスターどうしょ。

金色便器でいいかな・・・。

七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 』《後編》

「京介・・・私のエースを見せてあげる」

遊奈

LP2200

手札4

「おもしれえ。見せてみるよ」

鬼柳

LP1900

手札0

そんなに見たいなら見せてあげる。
私のエースを！

「まずはGN一蒼穹の粒機兵を召喚。そして私のフィールド上にGNモンスターがいることで、GN一原初の粒機兵を特殊召喚！」

遊奈

手札4↓2

GN一蒼穹の粒機兵

ATK1900

GN－原初の粒機兵

ATK1000

「その2体で、どうやってワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに勝つ気だ？」

「そう急かさしないで・・・私はこの2体をデッキに戻す！」

「デッキに？　コンタクト融合か？！」

「そうよ・・・二つの想いが束ねられた時、新たな剣が舞い降りる。コンタクト融合！　来て、GN－蒼穹の双粒機兵！」

GN－蒼穹の双粒機兵

ATK2400

・・・でもこの子だけじゃあ勝てない。
効果で破壊すれば、そのまま勝てる。
けど・・・それじゃあ駄目。

闇のデュエルは・・・確か、敗者に死を齎もたらしたはず。
つまりこの状態から勝ったら、京介は・・・。

「どうした、それで終わりか？　・・・それともこのデュエルで、俺が負けた時のことでも考えてんのか？」

「!」

「なに驚いてんだ？ 貴様らのように甘い人間の考えていることなど、お見通しなんだよ!」

ここから、どうすれば・・・。

・・・今は、この伏せカードに賭けるしかない!

「リバースカード、オープン! イオリアの望み!」

「あぁん?」

「このカードは自分フィールド上の、GNモンスター1体につき、私はデッキから1枚ドローできる。その後、私はドローした枚数×300ポイントのダメージを受ける」

「おいおい、どんなマゾカードだあ? そこまでしねえと駄目なくらい、詰まってんのかよ?」

「私のフィールドには、ダブルオー1体。よって1枚ドローするわ」

遊奈

手札2↓3

・・・!

このカード。期待通り・・・!

「ドローした方がいいが、300ポイントのダメージを受けてもら
ぜ」

「うぐうう・・・」

遊奈

LP2200↓1900

京介と、ライフが並んだ。

・・・ここで決めたい・・・決められる。
けれど・・・このままじゃあ・・・。

京介の気持ちは分からなくも無い。
けど・・・誤解ということを教えたい。

私には、ミカエルから貰った力があるのに、どうしようも出来ない・
・・・。

ていうか、それ不良品とかじゃないわよね？
こんな時に発揮しなくて、どうすんのよ。

こんな時くらい、力を貸しなさいよ・・・！

「・・・ああ？　なんだその腕の光？」

「え？　・・・なにこれ？」

見れば緑色に光る輪っか？が右腕に在った。
なにこれ？

もしかして、これがミカエルの言っていた主人公たちに劣らないほどの力？

でも……。

「光ってるだけじゃない……」

「くくく、面白えもんを見せてくれるじゃねえか。それで……終わるかよ？」

「まだよ！ 何回言っても聞かないあんたに……誤解だって聞かせるまでは、終わりじゃないわよ！」

そう啖呵を切った瞬間、デッキ……というかデュエルディスクが緑色の輝いた。

私は、何事ー！？と騒いでいるのだが、炎の檻の向こうー外の方で、ルドガーが眉を顰^{ひそ}めていた。

その視線を気にしながらも、不思議と私は落ち着いてきた。

脳裏にカードが浮かび上がってきた。
それも複数。

浮かび上がるのは、ダブルオーと、再び手札に舞い込んだオーガンダム。

そして、もう一枚のカード。その裏側。
それを辿るように、電流が迸る。

それは勝利の方程式だと感じた。

「私のフィールドにGNモンスターがいることで、チューナーモンスター、GN一原初の粒機兵を特殊召喚！」

遊奈

手札3↓2

「馬鹿な！ また引いたってのか！？ しかもあえてチューナーと宣言するだど！」

「いくよ・・・レベル6のGN一蒼穹の双粒機兵に、レベル2のGN一原初の粒機兵をチューニング！」

オーガンダムがGNフェザーを展開しながら消えていく。

残った二輪の輪にダブルオーが入っていく。

自分上から降ってくるGN粒子を、見るともなく見ながら、シンクロ口上を口にする。

「束ねられし想いが、今ここに集う。七天の剣よ、舞え！ シンクロ召喚！ GN一七剣の双粒機兵！」

ダブルオー！ セブンソード

GN一七剣の双粒機兵
ATK2800

私の目の前に・・・七つの剣を携えた機兵が舞い降りた。

両手の剣はそれぞれ長い剣、短い剣と分かれた。

後ろ腰には変わらずビームサーベルが二本。

両側のふくらはぎに増設されたハードポイントに一本ずつ短い刀剣が懸架されている。

そして一番に目を引くのは、左肩のコーンスラスターにマウントされた巨大な剣だ。

「シンクロ・・・だと・・・？」

「ダークシグナーになったからって、シンクロしてはいけないのかしら？　そしてセブンスードの効果で、このカードの攻撃力は墓地のGNモンスター1体につき100ポイントアップする！」

GN-七剣の双粒機兵

ATK2800↓3200

「なに！？　ワンハンドレッド・アイを、超えてきた！？」

「さらにここで、セブンスードの効果を発動！　1ターンに1度、手札のモンスターを墓地に送り、1枚ドローする」

けっこう良い効果だけど・・・その分の対価も、ある。

「私はGN一赤ハロを墓地に送り、ドローするわ・・・そして私はこの効果を発動した次のターンのドローフュイズをスキップしなければならぬ」

遊奈

手札2↓1↓2

「ふん、だがこれじゃあまだ俺のライフを削りきれねえぜ」

「さっき墓地に送ったのはGNモンスター・・・だからまだ攻撃力は上がるわ」

GN一七剣の双粒機兵

ATK3200↓3300

・・・でも、ここまで来ると、もはや憑いてるレベルだわ。
この子が来てくれたお陰で私は勝つ。
・・・やっぱり、勝つしかないわ。

「バトル！ セブンソードで、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに攻撃！」

「たかが300！ 次があるぜ！？」

「・・・ううん、ここで終わり。手札のデュナメスの効果を発動。
GNモンスターが戦闘を行う場合、このカードを墓地に送ることで、

戦闘を行うモンスターの攻撃力は・・・1600ポイントアップする」

GN一七剣の双粒機兵

ATK3300↓4900

「超えているのは300・・・そこに1600が来るって事は・・・！」

「そう・・・0、よ・・・」

セブンスードが、左肩にマウントしたGNバスターソード？を両手で構える。

ツインアイは、揺らぐことなく京介を見据えている。

私の視界にいてる京介は、なぜか揺らいでいる。

・・・いったい何時の間に、そんな技を覚えたのだろう。

「行って、セブンスード！ バスタアア・ブレイドオオ！！」

「がああああああああ！！」

鬼柳

LP1900↓0

勝利した。

あの京介との、本気のデュエルで・・・。
しかし・・・勝利の余韻に浸らせてくれないのか・・・。
ふと京介の方を向いた瞬間、視界が緑色に塗りつぶされた・・・。

※※※

ここは、どこだろう・・・。
辺り一面が光り輝いている。

けれど・・・眩しくない・・・。
むしろ温かくて、心が温まるようで・・・。
今なら誰とでも、分かり合えそうだ。

ふと、気づいた。
なぜか、今の私は裸だ。
どういうことだろうか？

「・・・遊奈」

「京介・・・その目・・・」

ふと気づくと、近くに京介がいた。
もちろん、京介も裸だ。
けれど、さっきとは違うのはそれだけじゃない・・・。
彼が纏う雰囲気そのものが・・・さっきとはまるで違う。

それを如実に示すのが、優しげな目だ。
さっきの怒りと憎悪に満ち満ちた黒い眼ではなく、昔の仲間こそが
第一だと言っていた澄んだ眼だ。

「遊奈・・・今まで悪かったな。あと、誤解していた・・・」

「え？　ていうか、どうして納得したの？」

自分で完結してくれるなら、それにこしたことはないのだが、どう
もあっさり過ぎて逆に落ち着かない。
一体・・・どうして・・・？

「ここに来たとき、お前の記憶が俺の中に、流れ込んできた。その
中に、あのセキュリティの奴もいた」

あの、というと遊星が名乗り出た時に居てた偉そうなセキュリティ
のことかしら？

「ああ、あの時のことは俺から見ても、遊星はあいつを睨んでいた。
なのに俺はあいつを、あいつらを信用していなかったんだ・・・散
々仲間だと言ってたのに、情けねえ。こんなじゃあ、あいつら
に会っても、きっと満足できねえぜ・・・」

「大丈夫だよ、京介。きっと大丈夫。遊星は・・・遊星だけじゃな
い、きっとみんな、京介のこと分かってくれるよ」

「そうか？　・・・いや俺が信じねえと、誰も信じてくれねえか・・・
・ありがとうな、遊奈」

うんうん、京介に笑顔が戻ってくれて嬉しいわ。これでも十年の付き合いのある仲間だしね！

「遊奈・・・お前はダークシグナーとして以外にも、力があるみてえだ。そのお陰で闇の力に飲まれないで済んでいるのかもしれないけど、気をつけろよ。何時何があるか分からないんだからよ」

「うん！」

・
・
・
あ、光が消えていく。

この不思議空間が、消えていくんだ。

…今気づいたけど、ここってダブルオーの裸空間じゃない!?

・
・
・
・
・
・
なんでさ。

気がつくと私は突っ立っていた。

目の前には倒れている京介……って！

「京介！ 大丈夫！？」

「ああ・・・俺はここで終わりだが、最期に会えたのがかつての仲間のお前で良かったぜ」

「ど、どうということ・・・？」

「闇のデュエルに敗北したものは、消え去るのが定めなのだ」

「ルドガー・・・！」

振り返れば、相変わらずに威風堂々とした出で立ちのルドガー。

発言からして、大物って感じだけど・・・きつと何か知ってるわね・・・！？

「ルドガー、京介を助けられないの？ 今にも・・・消えそうで、どうすればいいの・・・！？」

「ふむ・・・ならばお前の命を差し出すといい」

・・・は？

命を、差し出せ・・・？

なにそのいかにも悪役って感じの台詞。

・・・いいじゃないの。

乗ってやろうじゃないの。

「いいわ、私の命で京介が救われるなら……。それでどうするのよ……！」

「そう慌てるな。まず始めにお前は死んでいると言ったが、正確にはお前はまだ死んでいない。おそらくはその緑色の痣が、なにかしているのだろう……。今のお前は仮死状態であるというのが、正しいな」

仮死状態……。けど、なら私はどうして動いているのかしらね。ますます謎が増したわ。

「そこで、だ……。お前は本当の死を受け入れ、完全なるダークシグナーとなることで、鬼柳に命を与えるのだ……。私は、これについてなんら嘘はついていないぞ？」

「……。いいわ、完全にダークシグナーとなることを、受け入れるわ」

「ほう、度胸のある奴だ……。ならば覚悟しろ、瀬川遊奈よ」

ルドガーが懷から、銃を取り出す。

なんでそんな物騒なもんを持ってる、とかいう突っ込みはなしにしておこう。

今は、京介さえ助かれれば、それでいい。

「遊奈・・・やめろ。そんなことされて、俺が、満足できると思っ
てんのか！」

「あんたの満足なんて、私は知らないわ！　ありがたく私の命を受
け取れ！」

「さらばだ、瀬川遊奈よ」

轟音とともに私の額を、銃弾が貫いていく。
即死のはずなのに、ゆらりゆらりと視界が後ろに流れていくのが解
る。

視界の端で、黒く染まり消えていく途中だった京介の体が、緑色の
粒子に包まれそのまま消えていった。

恐らくは、勘だが遊星のもとに行ったに違いない。
きつとそうだといいな。

最後に見えた京介の口の動きから、判断する。
あの時私は、馬鹿野郎と言われたのね。

馬鹿でいい。

私は仲間のためなら・・・馬鹿にだってなんにだってなれる。
そう、思いながら・・・私の意識は闇に沈んだ。

七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 《後編》』（後書き）

遊奈「二回目だわ・・・死ぬの・・・」

まあまあ、ある意味でレアですよ。

こんな早くからこんなに死ぬ主人公は。

遊奈「嬉しくない！ 凧なんて全く死にそうに無いのに、なんでこっちがこんなに死んでるのよ」

凧「呼んだ？」

遊奈「呼んでない！ 帰れ！」

凧「はいはい」

・・・何時の間に乱入する術を・・・（汗）

遊奈「とりあえず京介は無事なのね？」

そうっすよー。

あと今回の君、ご都合主義にも程があるでしょ。

遊奈「うっ、作者のあんたが言うか！」

私はご都合主義ばっちこーいな奴なんで・・・。

遊奈「むかつく！・・・次回、八話『巨人の痣を持つ女』・・・ライディングデュエル、アクセラレーション！」

遊奈「そういえばルドガーの横に居たのって誰？」

ディマクエ・・・。

八話『巨人の地上絵の痣を持つ女』（前書き）

はい、遅くなってすみません。

今回はVS遊星です。

アニメでいうなら、33話〜35話とってくださって構いません。

嘘です！

鬼柳さんとうちの遊奈を入れ替えただけです！

今回はデュエルに量取られまくりでした。

なんせ一万文字超えましたから。

・・・まさか遊戯王で一万超えると思いませんでしたよ。
では、どうぞ。

八話『巨人の地上絵の痣を持つ女』

目覚めた時、私が居たのは見知らぬ……いや若干知っている薄暗い部屋だった。

あれ、なんかデジャヴ……。

「目覚めたか、瀬川よ」

「ルドガー……私は……」

「鏡を見ろ」

鏡……近くにあったそれを見ると、私は驚愕した。

なぜなら、私の目が黒くなっていたから。

正確に言うのなら、白目の部分が、だろう。

「……これが完全にダークシグナーとなった証ね？」

「そうだ。あの奇妙な痣の抵抗も、今はない。お前は自分の死を受け入れたことで、ダークシグナーへと生まれ変わったのだ」

ダーク……シグナー……。

主人公でもある遊星はシグナーで、旧知の仲である私は敵のダークシグナー。

皮肉ね……それを言うなら、あの京介もそうだけど……。

とりあえず今はどうしましょうか。

私の中の地縛神は、サテライトに向かっているシグナーと戦えと言ってるけど……。

「一体、誰が来るのかしらね？」

「ふ、ここに向かっているのは不動遊星だ……不動博士の息子を直に見たいが、ここはお前に譲ろう。体が疼いているのだろうか？」

そう、遊星という名前が出た瞬間、私の感情の奥にあるものが反応した。

それは宿命のようで、運命のようで、あるいは必然だったかもしれない。

遊星との、戦い^{デュエル}。

それを今か今かと待ち望む私がいるというのは、紛れも無い事実だった。

「……乗ったわ、私が行く。遊星と戦うのは、私」

「奴がいるのは……ここだな」

そう言って、地図を指差すルドガー。

案外近いことに笑う。

きっとその笑いの中には、様々な意味があったはずだが私には分か

らない。
少なくとも、今の私には。

※※※

「見つけた」

ついさっきまでクロウと一緒にセキュリティと遊んでいた遊星を見つける。

ここ数週間ほどこか離れていないが、相変わらず仲間との絆を大事にしているようで安心した。

そうじゃなければ倒しても面白くないから。

右腕を掲げる。

そこにあるのはガチャピ・・・巨人の地上絵の痣。

それに意識を集中すると、辺りに暗い霧のようなものが出始める。

霧が集まり、ガチャ・・・巨人の形の靄もやが遊星たちの進行方向・・・つまり私の近くに出来る。

さて、もう少しでしょう。

ようやくお遊びではなく、正真正銘のシグナーと、ダークシグナーの戦いが始まる。

・・・来たわね遊星。

「ふっ」

カードを遊星とクロウが乗るDホイールの近くの岩に投げる。
それは綺麗な軌跡を描いて、カッという小気味いい音と共に突き刺さる。

「あ？　　っておい、遊星！　このカードは！」

「奇跡の代行者ジュピター・・・！　お前は誰だ！？」

二人揃ってこっちを見る。

今の私はローブを被り、フードで顔を隠している。

そのせいか、二人からはただの不審者にしか見えていないのだろう。

だが。

遊星は、どこか信じたくないといった顔だ。

当然だろう。

ジュピターは遊星が私のデュエルを見学していた時に、ほぼ毎回使っていたカード。

嫌でも思い出す。

それでも一縷の望みに懸けているのだろう。

残念ながら、それは叶わないけどね。

「誰だって？　それは酷いわね。私のことを、忘れるなんてね！」

バサアッと、勢い良くロープを脱ぎ捨てる。
そのままガラクタの山に引っかかる。

そうそう言っただけで、今私が居るのはガラクタで出来た小高い山の上。

つまり私が二人を見下ろしているかたちになる。

「お前は！」

「遊奈！ どうしてお前が、ダークシグナーなんか……！」

「どうして？ 面白いことを言うのね、そんなの簡単じゃない……」

死んだのよ……。

言った瞬間、遊星の体から力が抜けた。

そのまま体をDホイールのハンドルに預ける。

まるで信じたくないと言っても言うかのように。

「ふざけんな！ あの遊奈がそう簡単に死んでたまるかってんだ！」

「でもそれはあんたの感情しか根拠は無い。人間なんて脆く、儚い存在なの。あんたのようにありもしないことを思い込み、精神が打ちのめされないようにする……逆に遊星みたいに、信じたくない」と耳を塞いだりしてる。これを見ても、あんたはただの人間である私が、巨大なガラクタに押しつぶされて生きていられると言うの？」

言い返せないのか、唇を噛み締め睨みつけてくるクロウ。強がっていたって、どうせあんたじゃあ私には勝てないわ。あんたのデッキと私のデッキでは考えているコンセプトが違うんだし。

「遊奈、教えてくれ。お前は・・・俺のせいで死んだのか？」

「さあ？ あんたが私を殺したかもしれないし、そもそも私は死んでいないかもしれない・・・というかそもそも私は遊奈を偽った別人かもしれないし、ただのお遊びで騙しているだけかもしれない」

「何が言いてえんだよ、お前は！？」

「簡単なことじゃないの・・・ねえ、デュエリスト？」

これでデュエル脳の遊星は簡単に釣れる。
今までの経験上で積んだことよ。

「なら、俺が勝てば、全てを教えてもらおうぞ！」

ほら、乗ってきた。

それにしても、全てか。

なかなか強欲じゃないの、遊星。

「好きにすればいいわ・・・私に勝てたなら、の話だけど」

言葉と同時、右腕を振りかざす。

現れるは紫とも青ともとれる炎で出来た巨人の地上絵。
それと同じものが空に浮かんでいる。

「なんだこりゃあ!」

「これは・・・一体・・・?」

二人の混乱を余所に、ヘルメットを被る。

そのまま横に停めてあったDホイール・・・スカイ・フライヤーに
跨り、エンジンをかける。

その勢いのままエンジンを噴射させ、一気に遊星の元まで加速して
いく。

「さて遊星。ここまで来たのなら、もう余計なことは一切なしにし
ましょう?」

「ああ。俺もお前には聞きたいことが山ほどある」

「・・・随分と自分本位なのね、人殺しの癖に」

「ツツ!!」

とりあえず本人が気にしてるなら、それを活用しないなんて有り得ない。

デュエル前も、最中も精神攻撃ほど使えるものもない。

煽れば煽るほど、揺らせば揺らすほどに相手の集中力を削げる。

主観で言うなら、今の遊星は片翼の無いスターダストだ。
さして恐れるほどのこともない。

「さてそろそろ始めましょうか、人殺しさん？」
ゆうせい

「ッ！ ああ・・・」

「「決闘！」」
デュエル

遊奈

LP 4000

手札 5

spc 0

遊星

LP 4000

手札 5

spc 0

つい人殺しなんて言ったけど、これはいいわ。

あの苦しさや辛さ、罪悪感に歪む顔。

見てるだけでゾクゾクする。

すごくイジメテあげたい。

私の手で翩って弄んで、そしてゆっくりとじわじわと私の手でイかせてみたい。

「俺の・・・私のターン！」ッ！」

遊奈

手札5↓6

よく悪役とかはやるけど、実際に割り込みなんてしたら気持ちいい。あの遊星の驚きと悔しさで歪んだ顔なんて、それだけで興奮する。

「GNー赤ハロを守備表示で召喚」

遊奈

手札6↓5

DEF100

今はこれで十分。

だってまだ始まったばかりなんだから。

前戯すらも、まだ早い。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

遊奈

手札5↓4

「俺のターン、ドロ」

遊星

手札5↓6

s p c 0 ↓ 1

遊奈

s p c 0 ↓ 1

「俺はスピード・ウォリアーを召喚！」

遊星

手札6↓5

A T K 9 0 0

過労死その1ね。

まあ遊星は気に入ってるみたいだし、序盤のアタッカーくらいには活躍するし・・・ああ、そういえばジャンク・シンクロンで蘇生できるわね。

「スピード・ウォリアーで攻撃！　そしてこの時、効果を発動する！　このカードは召喚されたターン、バトルフェイズ中は攻撃力が

2倍になる！」

ATK900↓1800

案外、これはこれでなかなかの効果だと思っただけね。
ま、所詮は2000には届かないんだけど。

「ソニック・エッジ！」

無残にも蹴り飛ばされ、爆発するハロ。
だからといって特に感じることも無いが・・・。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

遊星

手札5↓3

「私のターン、ドロ」

遊奈

手札4↓5

spc1↓2

遊星

s p c 1 ↓ 2

さて、この手札でどうしようか・・・。

普通に倒せるだろうけど、伏せが二枚か。

結構微妙ね。

・・・通るかしらね、攻撃。

「遊奈！」

「・・・？」

「教えてくれ、ダークシグナーとは一体何なんだ！？ どうして・・・お前が」

「ダークシグナーとは、冥界より蘇りし破滅への導き手・・・現世への強い未練が、蘇る鍵となる」

「蘇る・・・だと・・・？」

まあ普通は意味不明よね。

だってどう見ても生きてるのに、それが蘇っているなんて言われちゃあさ。

でも・・・これが現実！

「驚くのは勝手だけど、進行はさせてもらおうよ」

「遊奈！ お前は未練とは、何なんだ！？」

「・・・私はGN一連合^{フラッグ}国の機兵を召喚！」

遊奈

手札5↓4

ATK1200

これで終わりじゃない。

量産機だからね、フラッグは。

つまり数はある。

「フラッグの効果発動・・・自分フィールドにこのカードしか存在しない場合、デッキからもう1体のフラッグを特殊召喚できる・・・来なさい！」

ATK1200

これで一気に攻められる。

けれど、そう簡単には終わらせない。

ゆっくりと、じわじわといたぶり苦痛を感じたままイかせてあげるわ・・・遊星。

「1体目のフラッグで攻撃」

「リバースカード、オープン！ ガード・ブロック！ 戦闘ダメージを0にして、カードを一枚ドロウする！」

遊星

手札3↓4

・・・随分と猪口才なことをしてくれる。
たとえばそんなことをしても無駄だと、思い知らせてあげる。

「2体目のフラッグでダイレクトアタック」

「まだだ、リバースカード、くず鉄のかかし！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、再びセットする！」

無駄なことを・・・。

そんなことしたって、あんたの敗北・・・つまり死は確定なのよ・・・。

「・・・カードを二枚伏せ、ターンエンド」

遊奈

手札4↓2

「俺のターン・・・ドロー！」

遊星

手札4↓5

s p c 2 ↓ 3

遊奈

s p c 2 ↓ 3

ドロしたカードを見た時、遊星はふっと笑った。

その表情を見た瞬間、私の中でナニカがぶちっと切れたような音が聞こえた。

「・・・何が可笑しいの？」

「可笑しい？ 俺は、お前とのデュエルを楽しんでいるだけだ」

「デュエルが楽しい？ 敗者は死ぬだけの、この闇のデュエルが？」

「・・・敗者は、死ぬ？」

なんだ知らなかったのか。

そんなことも知らずに、この私とのデュエルを楽しんでいるなんてふざけたことを言っていたのか、こいつは。

「ふふふふ、あははははははは！ どうしたの、その顔は！ 私とのデュエルを楽しんでしよう？ だったら、もっと笑いなさい

！ 私はあるたを嗤ってあげるからさ！」

「ッッ！！」

その絶望に染まった顔が見たかったと、私の大半を奪った地縛神が昂り叫ぶ。

そんな哀しい顔は見たくないと、私の大半を奪われた私が泣き叫ぶ。

どうしようもない行き止まりに辿りつき、打ちひしがれた遊星は見ていて滑稽だ。

どうしようもない行き止まりに辿りつき、打ちひしがれた遊星を助けてあげたい。

「ははっ、続けなさい遊星！ プレイを続けないのならば、私のターンにするわよ！」

「・・・俺は・・・俺は、遊奈を・・・死なせたたくない・・・二度も、あいつを・・・」

「・・・続行する気はないのね？」

遊星にプレイングを続行する気はないと判断した遊奈。
自分のターンへと進めようとしたその時だった。

『顔を上げろ、遊星！』

どこからか通信があった。

私のモニターには何も映っていない。

ならば、遊星号のモニターに映っているのだろう。

つい最近聞いた覚えのある声の主の顔が。

『お前は、遊奈の言葉一つで折れるような、脆い信念しか持っていないのか!?』

「鬼柳・・・だが、俺は・・・」

『思い出せ！ お前が誰よりも見ていた遊奈は、そんな奴だったのか！ 遊星！』

『そうだ！ 遊星、思い出せよ・・・お前は、遊奈から未来を託されていたんじゃないのか?!』

「・・・そうだったな、鬼柳、クロウ。俺は、俺自身を・・・それに何よりも遊奈を信じていなかった!」

そう言って、顔を上げた遊星の顔には・・・紛れもなくいつもの溢れるような自信が満ち満ちていた。

なるほど・・・そうでなければ、私の相手など務まらない。

そうでなければ・・・私の手でイカすに足る存在なんかじゃない!

「まだ俺は、立ち止まったりはしない! 俺はジャンク・シンクロンを召喚!」

遊星

手札5↓4

あのカード・・・！

まさか、さっきのドローで引いていたの！？

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地のレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する！ 再び現れろ、スピード・ウォリアー！」

DEF400

レベルの合計は5。

つまり遊星のフェイバリット・モンスター。

「レベル2のスピード・ウォリアーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが背中のリコイルスターターを引っ張り、そのまま空中に飛ぶ。

その姿は消え、代わりに三つの輪が並ぶ。
そこにスピード・ウォリアーが飛び込む。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ATK2300

口上を読み上げた瞬間、遊星の頭上にあった三つの輪の中心から光が迸る。

そこから現れたのは、もはや何回見たかとも思い出せないほど、その目に焼き付けたモンスターだ。

「あんたなら、そのままシンクロすると思っていたわ」

「どういうことだ・・・？」

「それを待っていたってことよ・・・リバーズカード発動。負傷兵の突撃！ 自分フィールドのGNと名のつくモンスターを1体破壊し、相手のモンスター1体を2回目の相手のスタンバイフェイズまで除外する」

どこかぼろぼろになったフラッグが、ジャンク・ウォリアーの腰に組み付きそのまま真後ろに出来た異次元の穴まで突っ込んだ。

「くっ・・・俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

遊星

手札4↓3

これで遊星の場は空いた。

ここから一気に攻めたいけど、あのかかしが厄介ね。

・・・猶予はまでもう1ターンあるし、ここは場を揃えようかしらね。

「私のターン、ドロ―」

遊奈

手札2↓3

s p c 3↓4

遊星

s p c 3↓4

「私はフラッグをリリースして、DT^{アルヴァアロン}黄金の機翼兵を召喚」

遊奈

手札3↓2

A T K O

これが私のダークチューナー。

そのレベルは5。

・・・すこしの細工がいるけど、その分私のダークシンクロモンスターは出せば、その制圧力は凄まじい。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札2↓1

これで下準備は完了。

あとはレベル3のモンスターを引くだけ。

「俺のターン、ドロー！」

遊星

手札3↓4

s p c 4↓5

遊奈

s p c 4↓5

「俺はマックス・ウォリアーを召喚！」

遊星

手札4↓3

A T K 1800

デメリットアタッカーか。
確か攻撃力上昇効果があったわね。
対策はあるのだけでもね。

「マックス・ウォリアーで攻撃！　そしてこのカードが相手モンスターに攻撃する時、攻撃力が400ポイントアップする！　いけ、スィフト・ラッシュ！」

ATK1800↓2200

「リバーズ発動。和睦の使者。これでこのターン、私のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘でのダメージも0になる」

「くっ、ターンエンド」

ふふ、エンドしたわね？
ここから恐怖のダークシンクロが始まるのよ。
覚悟なさい？

「私のターン、ドロー」

遊奈

手札1↓2

spc5↓6

遊星

s p c 5 ↓ 6

・・・来た。

これではぼ場は私のものになった。

「私はGN^{シンクス}—Xを召喚！」

遊奈

手札2 ↓ 1

ATK 1400

「さらにリバースオープン！ ブラック・ウェーブ！ 自分フィールドのモンスターのレベルを全てその数値分マイナスにする！ 私はGN—Xのレベルを3から—3に、アルヴァアロンのレベルを5から—5にする！」

5 ↓ — 5

3 ↓ — 3

これで完了。

あとは・・・召喚させるのみ！

「レベル—3のGN—Xにレベル—5のアルヴァアロンを、ダーク

チューニング！」

アルヴァアロンが翼を開き、そこから黒い星が五つGN-Xに向けて飛んでいく。

それを三つの黒い星を出しながら受け入れる。

「黄金の輝きが、^{アルヴァアローレ}世界を埋め尽くす。今、我が手に覇道を！　ダー
クシンクロ！　黄金の巨砲機王！！」

ATK3000

雲を引き裂き、天空より現れたのは黄金の巨体。
その大きさはスカイ・フライヤーの大体120倍……くらいかな？
でかすぎだな。

「でかい……」

「ふん、かかしがいてるせいで攻撃出来ないわね……私はこのままターンエンドよ」

「……こいつを倒せば、遊奈の下へ近づけるんだな？」

「倒したら、よ」

「いいだろう……ドロー！」

遊星

手札3↓4

s p c 6↓7

遊奈

s p c 6↓7

「このスタンバイフェイズに、負傷兵の突撃の効果で除外されていたジャンク・ウォリアーは、俺のフィールドに戻る！」

ATK2300

「・・・だからどうしたの？ 私の場にアルヴァトーレがいる限りは、あんたに勝機はほぼ無いわ」

「絶対と言わないところが、お前らしいな」

「知ったような口を利かないで、人殺し」

「ッッ！！」

その顔よ・・・もっとその痛みに耐える顔を見せて。
それこそが私の最高の餌となるのよ。

「・・・俺は手札から、S pーラピッド・ショットウィングを発動！自分のスピードカウンターが五つ以上ある時、自分のモンスター1体の攻撃力は、エンドフェイズまで自分のスピードカウンターの数×100ポイントアップする！俺はジャンク・ウォリアーを選択する！」

遊星

手札4↓3

A T K 2 3 0 0 ↓ 3 0 0 0

「攻撃力が並んだ、か・・・それで、次はどうするの？」

「・・・俺はこのターンで、決着をつける！」

「それは勇ましいわね・・・ただし、それが出来るのが確実になければ、ただの無謀と言うのだけど？」

「秘策なら、ある！ジャックから託された、この絆が証明する！俺はS pーオーバー・ブーストを発動！スピード・カウンターを四つ増やす！」

遊星

手札3↓2

s p c 7 ↓ 1 1

10を超えた・・・まさか、ファイナル・アタック？

「スピードカウンターが10以上あることで、俺はこのカードを発動できる・・・Sp—ファイナル・アタックを発動！ このターン自分のモンスター1体の攻撃力は2倍になる！」

遊星

手札2↓1

ATK3000↓6000

随分なインフレしたわね。
けれど・・・まだ甘い。

「ジャンク・ウォリアーで攻撃！ スクラップ・フィストオオオオオ！」

「これはまずいわ・・・なんつってね、リバーズカード発動！ 暴走！」

「なっ!？」

「自分の機械族モンスターの攻撃力は2倍になる！」

ATK3000↓6000

「攻撃力が並んだ!？」

『だが、まだ遊星の場にはマックス・ウォリアーが残っている!』

京介・・・ダークシンクロを使っていたのに、彼らの恐ろしさを忘れちゃったのね？

この程度なわけがないのにさ。

「アルヴァトールレの効果発動！ このカードが戦闘を行う時、相手モンスターのレベル×200ポイント攻撃力が上昇する！ ジャンク・ウォリアーのレベルは5・・・つまり1000ポイントアップ！」

ATK6000↓7000

ふふ、これが今のマックスパワー！

はつきり言おう・・・今ならば、遊星になんて負けない、と！

「ぐあああああ!！」

遊星

LP4000↓3000

spc11↓10

「あはは！ そのまま炎の中で焼きつきなさい！」

「くっ、うおおおおおお！」

炎に触れるぎりぎりで持ち直した遊星。

しかし無駄だ。

どうせ次のターンには一気に攻めるのだから。

「はっ、はっ・・・ターンエンド。そしてエンドフェイズに、SP
ーオーバー・ブーストの効果でスピードカウンターは1になる」

「あはは！・・・もう終わりなの？ 情けないわね。まだイかせ
足りないのに、ふらふらじゃない」

「遊奈・・・何がお前をそんなに駆り立てるんだ？」

「はぁ・・・それは私に勝てたらと言ってるでしょう？ ドロー！」

遊奈

手札1↓2

spc7↓8

遊星

spc1↓2

攻めるとは言ったが、遊星の場にかかしが残っている以上は何も出
来ない。

・・・ならば、勝負は次のターンから。

「・・・一枚カードを伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札2↓1

「俺のターン、ドロー！」

遊星

手札1↓2

s p c 2↓3

遊奈

s p c 8↓9

「スピードカウンターが二つ以上あることで、俺はS p エンジェ
ル・バトンを発動する！」

遊星

手札2↓1↓3↓2

「そして俺は、マックス・ウォリアーをリリースして、クイック・
シンクロンを召喚！」

遊星

手札2↓1

ATK700

「さらに自分フィールドにチューナーがいることで、墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

「合計は、7か！」

「クイック・シンクロンはシンクロ素材となる時、シンクロンと名のつくチューナーをシンクロ素材とするモンスターしかシンクロ召喚出来ない！ 俺が選択するのは、ジャンク・シンクロン！」

7のジャンクといえば、厄介なあいつしかない。
止める術も、ない！

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！
光さす道となれ！ シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・アーチャ
ー！」

ATK2300

「・・・面倒な奴め」

「ジャンク・アーチャーの効果を発動！ 相手モンスター1体をエンドフェイズまで除外する！ デイメンション・シュート！」

「これで私の場はがら空きか。けど、あえて言うなら・・・それは悪手ね。アルヴァトールの効果発動・・・このカードが相手のカードの効果によってフィールドを離れたとき、相手のモンスター1体を破壊する・・・私は、ジャンク・アーチャーを破壊する！」

「ぐっ・・・だが、まだマックス・ウォリアーが残っている！ 行け！ スイフト・ラッシュ！」

遊奈

LP 4000 ↓ 2200

spc 9 ↓ 8

「あああああああああ！！！」

「遊奈！」

「遊星え・・・痛いよ・・・どうして、こんなことするの？」

「！！ 俺は・・・」

『惑わされるな、遊星！ 遊奈そいつの顔をよく見ろ！』

「・・・！ 笑って・・・いる・・・？」

あーあ、ばれちゃった。

京介も京介で、随分つまらないことしてくれるじゃない。
せっかく精神的に虐めてあげようと思ったのに……。

「くくく、どうしたの？　もう終わり？　もっと私に痛みをちょうだいよ、遊星！」

「……カードを一枚セットし、ターンエンド」

遊星

手札1↓0

「このエンドフェイズ！　私のアルヴァアロンが舞い戻る！」

ATK3000

「私のターン！　ドロー！」

遊奈

手札1↓2

s p c 8↓9

遊星

s p c 3 ↓ 4

「ははっ、砕け散れ、マックス・ウォリアー！ ゴールド・バスターキヤノン！ さらにモンスター効果で攻撃力は、800ポイント上昇する！」

A T K 3 0 0 0 ↓ 3 8 0 0

「リバーiscard、くず鉄のかかし！」

「カウンター罠！^{トラップ} 魔宮の賄賂！ 魔法・罠の発動を無効にして破壊！ そして、遊星・・・私からのご褒美よ、一枚ドローなさい」

遊星

手札 0 ↓ 1

「微塵に消えろ！」

遊星

L P 3 0 0 0 ↓ 1 0 0 0

s p c 4 ↓ 3

「うわあああああ！！！」

「あはあ、いい声・・・もっと、もっとその悲鳴を聞かせてえ！」

「はあ・・・はあ・・・」

「もう腰が砕けちゃってるの？ 貧弱ね。ちょっと失望したわ・・・
ターンエンド」

もっと楽しめるかと思ってたのに、結構期待外れだわ。
・・・でも次でまたひっくり返すから、遊星とのデュエルは楽しめ
そうなんだけどさ。

「くっ・・・俺の、ターン！」

遊星

手札1↓2

s p c 3 ↓ 4

遊奈

s p c 9 ↓ 1 0

また、笑った。

キーカードを引いたのね。

そのドロー力・・・尊敬に値するわ。

「俺はハイパー・シンクロンを召喚」

遊星

手札2↓1

ATK1600

「さらにリバースカード・オープン・・・ロスト・スター・ディセント！ 墓地のジャンク・ウォリアーのレベルを一つ下げ、守備表示で特殊召喚！」

レベル5↓4

DEF1300

「行くぞ、遊奈！ これが俺の・・・俺たちの絆の証だ！ レベル4のジャンク・ウォリアーにレベル4のハイパー・シンクロンをチューニング！ 集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

ATK2500

来たか・・・シグナーの竜にして、遊星のエース。
これを打ち破ってこそ・・・ダークシグナー。

「さらにシンクロ素材となったハイパー・シンクロンの効果で攻撃力は800ポイント上昇する！」

ATK2500↓3300

攻撃力を超えた、か。

でも・・・まだモンスター効果での上昇が残っている。

「まだだ！ リバーズカード、シンクロ・ストライク！ シンクロ
召喚したモンスターの攻撃力は、シンクロ素材にしたモンスターの
数×500ポイントアップする！」

ATK3300↓4300

それでもまだ届かない。

・・・まさかあの手札が、最後の締め？

「このカードが、俺たちの絆を紡ぐ！ S p ースピード・エナジー
を発動！ 自分のスピードカウンターが二つ以上ある時に発動でき
る！ 自分のモンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまでスピ
ードカウンターの数×200ポイントアップする！」

ATK4300↓5100

とうとう、超えた！？

しかもあのカードは確か、私が遊星にあげたカード・・・！

「遊奈！ 俺たちの絆が、お前の中の狂気を打ち砕く！ 響け、シ
ューティング・ソニック！」

「モンスター効果！ 戦闘を行うモンスターのレベルの200倍の
数値をアルヴァトールの攻撃力に加える！」

ATK 3000 ↓ 4600

まるで届いていない！

アルヴァトールが、負けるですって！？

「はあああああああ！」

遊奈LP 2200 ↓ 1700

「・・・でも、まだ終わりじゃないわ・・・アルヴァトールが戦闘
で破壊された時、黄金トークンを2体、守備表示で特殊召喚する」

DEF 500

DEF 500

ふふ、地縛神を呼ぶ準備は整った。
あとはこの手に呼び寄せるだけ。

「遊星・・・随分と粹がってるみたいだけど。あんたのDホイールそれも、がたがた言ってるじゃないの・・・やっぱ闇のデュエルを舐めてかかった報いなのよ」

「だがそれももうすぐ終わる！俺が、お前を闇から救い出す！」

「出来るものならね・・・私のターン、ドロ」

遊奈

手札2↓3

s p c 1 0 ↓ 1 1

遊星

s p c 4 ↓ 5

来ていないか・・・ならば、無理やり呼ぶまで。

「S p エンジェル・バトン発動！二枚ドロし、一枚捨てる」

遊奈

手札3↓2↓4↓3

「来ない・・・なら！S p シフト・ダウン！スピードカウンターを六つ取り除き、カードを二枚ドロ！」

遊奈

手札3↓2↓4

s p c 1 1 ↓ 5

・・・口端が釣りあがる。

右腕の巨人の痣が熱を持つ。

心が昂るのが、はつきりと感じられる。

「2体の黄金トークンをリリース！ 深き闇の底より、地に縛られし大いなる邪神が蘇る！ 降臨せよ、地縛神 C c a p a c A p u
！」

カードをどんよりと曇った空へと掲げる。

空へと光が突き進み、やがて雲を突き抜ける。

その晴れ間に、拳のような不気味な物体が現れた。

「な・・・あれ、は・・・」

「うふふふ！ あれこそが地縛神の心臓！ 地縛神の核！ そして、私たちダークシグナーが求める生贄を集めるためのものよ！」

「地縛・・・神・・・」

私が懇切丁寧に説明をしていると、さらなる異変が起きた。
炎で描いた地上絵の周りにローブを着た人間が集まりだした。

おそらくはルドガーが用意したものとはこれのことだろう。

「彼らは一体・・・？ 遊奈！ この人たちはなんのためにこんな所に！」

「あら？ 分からないの？ 生贄よ、生贄。地縛神を現界させるには多くの生贄が必要な・・・ああ、あんたたちシグナーは大丈夫よ？ あとそれ以外なら対戦相手なら、生贄にはされないけども・・・」

「そういうことじゃない！ そんなことをしてまで、お前たちは何がしたいんだ！」

やれやれ、熱くなっちゃってさ。
さっきがずっと言ってるのに。

「だーかーらー・・・それはデュエルに勝ったら教えてあげるって言ってるのよ！」

私の叫びに呼応してか、人々が球体のようになり、そのまま地縛神の心臓に吸い込まれていく。
一定量に達すれば、心臓が脈動を始めた。

無意識の内に私は自分の左胸に手を置いていた。
その脈動は、まさしくあの心臓の脈動と同じ動きをしていた。
今、私はそれを理解して、歓喜している。

「さあ・・・その姿を現しなさい！　コカパク・アップ！」

オオオオンという妙な叫びのようものを発しながら、サテライトの大地から巨大な腕が生えた。

否、生えたのではない。

その腕はがっしりと地面を掴み、そして・・・地縛神の巨体が現れた。

「ふっ、ふふ・・・あははははははは！！　見なさい遊星！　これが私の神！　私に新たな命を与え、闇の使徒としての力をくれた神よ！　あははははは！」

「なんだ・・・このモンスターは・・・」

『まずい！　地縛神が来た以上、遊星の場のカードじゃ対応出来ない！』

『あ、おい、鬼柳！　どうすんだよ！？』

『どうって、こうすんだよ！』

ふん、今更何をやっても無駄よ。
これで一人目のシグナーは滅びた。

「地縛神で攻撃！」

「く、攻撃力ではこっちが上だ！ 迎え撃て、スターダスト！」

遊星に向かって振り下ろされたコカパク・アップの右腕に突っ込むスターダスト。

しかしまるで何もなかったかのように、音もなく手応えもなくスターダストはすり抜けた。

「な!?!」

「地縛神はぁ・・・ダイレクトアタックが出来るのよ！」

手のひらの下部が地面と接触する。

ごごごと音を立てながら、死へと誘う手が遊星に迫る。

「終わりよ!」

地縛神の手が触れるか否かというところで、突然遊星号がクラッシュし後方へと流れていった。

よくよく見れば、遊星号の前輪の一部が横一線に切れている。そしてクラッシュしたところには、一枚のカードが。

「ブラッド・ヴォルス・・・ふん、京介ね」

デュエルが続行できる状態じゃないから、今回は無効ってわけね。へえ、京介も考えたじゃない。

割と後ろの方まで転がっていった遊星のもとまで近づく。

肉体的に大ダメージを受けたが、さらに精神的にダメージを与えるのもおつなものだ。

通ならば基本だろう。

「遊星・・・来る時^{きた}が来れば、また痛めつけてあげる・・・その時までには、その甘い考えを直して、私にイかせられ、死のダンスを踊らされるのを心待ちにしてなさい、あははははは！！」

去るときに、遊星が私の名を呼んだのは気のせいだろう。とか呼ばれたのは分かったけど、あえて無視した。だってそっちの方が、精神的なダメージとなるじゃない。

今日のサテライトもまた、吐き気がするほど、変わっていなかった。私が落ち着いていられるのが、余計に・・・ね。

八話『巨人の地上絵の痣を持つ女』（後書き）

遊奈「…………誰、あれ？」

あなたです。

遊奈「嘘よ！　だってあんな言葉使ったことないし、それに何あのテンション！？」

ダークシグナーになったんですから、キャラ崩壊してもいいと思いますよね？

遊奈「ならねーよ！　ていうか、GNデッキならいつもの子らは？
！」

やだなー。ダークシグナーになったのに、主人公サイドの彼らを使えると思ってるのですか？

頭おかしくないですか？

遊奈「酷い！？　…………話を変えるけど、最後らへんの京介なんだけど…………あれ、どっから投げたの？」

アニメを見るに…………だいたい数百mくらいじゃない？

遊奈「ええい、サテイスファクションのリーダーは化け物か！？」

あ、あなたも練習すれば出来ますよ？

遊奈「やりたくない！」

では次回、第九話『予期せぬ事態 激突するイレギュラー!』
デュエル、スタンバイ!

遊奈「スルー!? しかもイレギュラー!?」

そういえばディマクさん、またはぶっちゃった。

遊奈「あ、ジャックもだわ」

九話『未知なる決闘者 その名は厨二!』（前書き）

どうもクアンタです。

遅れてすいません・・・諸事情でパソコンを使えませんでしたので。

今回は遊奈が途中ソリティアします。

私はソリティアが好きではないのですが、まあいいんじゃない?という感じでやっちゃいました☆ミ

九話『未知なる決闘者 その名は厨二!』

前回のあらすじ

ワレ ユウセイ ゲキハ。

コレヨリ キカン ス。

・・・うん、ないわ。

いや、勝ってはいないよ？

京介の判断があと少しでも遅れてたら、遊星が死んでいたのは否定しないけど。

・・・遊星との、デュエル・・・。

ああーーーーー!!

思い出したら急に恥ずかしくなってきた!

あと猛烈な自己嫌悪ががが!!

「Be cool Be cool・・・落ち着け私。あれは別人だから・・・あの遊奈は別人。決して私じゃない。そう地縛神に操られて、あんな変な台詞言ってただけだから、ノーカウントよ」

「・・・・・・・・瀬川」

「うひゃあ!」

誰!?

もしや敵襲!?

「さっきから何をぶつぶつ言っている」

「ルドガーか・・・驚かせないでくれる?」

「私が悪いのか?・・・まあいい、お前にやってもらいたいことがある」

私にやってもらいたいこと?

もしかしてまたシグナーを襲撃するの?

ていうかそうなたらまたあのハイテンション遊奈になるんじゃない?・・・

それだけはノーセンキューね。

「なに、大したことではない・・・近くで妙なエネルギー反応があつてな。それをお前に調査してきてほしい」

「要は雑用ね・・・それで? 場所はどこよ」

ここだ、と地図のある地点を指差しながらこちらに見せるルドガー。なるほど。

確かに近くだ。

これなら私たちの内の誰かが行く方が妥当か。

「私はそれで構わないけど、ディマクは？ あいつに行かせればいいんじゃないの？」

「ふむ、それも一理あるな・・・お前はついさきほど戻ってきたばかりだ。だが、奴は今所用で手が放せないのだな」

所用・・・ああ、確か精霊世界がどうのこうのって言ってたわね。ま、私はそんなもんだっていいけど。

「じゃ、私が行くしかないか・・・そういえば、もう一人は？」

「奴なら、あちらシティで暗躍している」

「ふうん、そう」

それにしても、世界中で知られてるあのミステイ・ローラが、まさかダークシグナーなんてねえ。

ファンが聞いたら卒倒しそうな事実ね。

「さて・・・一体何が起こるんでしょうね？」

※※※

今私はDホイールに搭載されているマップ機能で確認しながら、ルドガーが示していた場所に向かっている。

向かっているといっても、あと三分くらいで到着しそうだが……。

それにしても、今更ながら遊星は大丈夫だろうか。

あんな酷いことを言ってしまったし、シグナーとダークシグナーで戦えば必然的に闇のデュエルになるとはいえ、怪我也させてしまった。

うう、今度会うときどんな顔すればいいんだろ……。

遊星は優しいから、なんだかんだ言って許してくれるかもしれない……かもしれない。

だけでもし許してくれなかったら……どうしよう。

『ピー ピー』

What?

何が……ってすぐ目の前に廃墟が!?

「避けきれ……なあああああああい!!」

ガゴォオンと凄まじい衝突音とともに、脆くなった壁を粉碎しながら突っ込む私とスカイ・フライヤー。

廃墟だけあって舞い上がった砂埃の量が半端なかった。

「けほ、けほっ。うう、前方不注意だわ・・・あれ、現在地とマップのマークが一致してる？　ということとは」

「誰だ！　俺様の領域に無粋にも突っ込んできやがった奴は！？」

奥のほうから出てきたのは、なんというかテンプレ乙としか言いようのない奴だった。

まず銀髪。そしてオッドアイ。

別にそれは構わないけど、銀髪ならチーム厨二のハラルドの方が格好いいと私は思う・・・なんとなく。

まあ遊星の方がカッコイイけどね！

・・・まあそれはおいといて、あと服装。

なんか言葉にしづらい。

こういう格好を形容するなら・・・オサレ？

「・・・フツ」

「貴様！　今、俺のことを見て鼻で笑ったな？！」

おっとといけないいけない。

あまりにもな格好に、ついね。

画面の前の皆だって、そう思うだろう？

「・・・お前、よく見たらなかなかの容姿をしてるじゃないか。俺

様のハーレムの記念すべき一人目にしてやるぞ？」

「却下。出直せ、この厨二野郎」

「何だと！・・・よくよく見れば貴様こそ、ダークシグナーのよ
うな格好をしやがって！ コスプレとは痛い奴だ」

こいつ馬鹿なの？

一般人はダークシグナーのことなんて知らないし、そもそもサテラ
イトに居てる時点で操られている一般人で発想は無い訳！？

・・・いや普通に会話が成り立った時点でそれはないけどもさ。

「まったく神様も送るのなら、こんな湿気た場所ではなく、トップ
スに送ってくれたならよかったのに・・・何故俺様が、神に選ばれ
た主人公たる俺様がこんな間抜け面した女の相手なぞせねばならん
のだ」

こいつ、いちいち言うことが苛々するわね。

しかも自分で主人公とか・・・おお、痛い痛い。

・・・でもこいつが勝手にぶつぶつ言ってくれてるお陰で、こいつ
が転生者ということが分かった。

そこ。初見で看破してたとか言わない。

「・・・そういう訳で俺様はシティの方に行かねばならないから、
そのDホイールを置いて失せろ」

「その憚りない不屈きな物言いも、ここまでよ……これを見なさい」

テンプレ男に見せつけるのは、右腕のガチャピンの痣。

あ、いけない。

ついガチャピンって言っちゃった。

まあいいよね。だって凄くガチャピンに似てるし。

あ、それと今更だけど……もしかしてルドガーが言ってた妙なエネルギー反応って、神様がこの世界に干渉を加えたからかな？
このテンプレ乙を、この世界に捻じ込んだときになんか力使ったのかな？

「貴様、それは!？」

「ダークシグナー、瀬川遊奈。生憎と京介は遊星の下に居るわよ」

「……はん、貴様も同類か？」

「あんたと一緒にしないでくれるかしら？　だって——」

——虫唾が走るから。

そう言った瞬間、奴のこめかみに青筋が浮かぶ。
続いて何かがぶち切れた音。

「殺す、殺す殺す殺す殺す、殺す！」

「そうお望み通り、殺してあげる。この闇のデュエルで、ね」

右腕を掲げると、周囲を青紫の炎が包む。

私とテンプレを中心に円状に展開される炎。

いつも思うけど、なんで何の燃料もなく突然燃え上がるの？
どうだっていいけど。

「始めましょうか。テンプレ」

「誰がテンプレだ！ 俺様の名前は「決闘^{デュエル}」聞けよ！ くそつ、決^{デュ}闘^{エル}！」

遊奈

LP 4000

手札 5

転生者

LP 4000

手札 5

「俺様の「私のターン」またか、割り込むな！」

遊奈

手札5↓6

割り込んだはいいけど・・・このデッキ。
駄目じゃん。

なんで・・・なんでデブダンなのよ。
もしかして代行と一緒に来たの？

「おら、どうした。テメエのターンだ」

あれ、デュエルが始まってからこいつのキャラ変わりすぎでしょ。
私には実害ないからいいけど。

「モンスターをセット。さらにカードを二枚セットしてエンド」

遊奈

手札6↓3

基本的な初動ね。

外面的に見ればね。

誰が分かるのかしらね・・・両方ともブラフだって！

「ふん、セットか・・・どうせ大した事ないモンスターだろ・・・
俺様のターン！」

転生者

手札5↓6

どうでもいいけど、なんで一人称を俺様で統一してんの？
見た目的に言えば、私とかクールな感じじゃないのかな？
・・・やっぱりどれもなしだわ。
吐き気がした。

「相手フィールド上にモンスターが存在することでこのモンスターは特殊召喚できる・・・来い、TGストライカー！」

転生者

手札6↓5

ATK800

ええ、TGっすか？
ていうかTG使っているの？

前に友達が言ってた（聞かされた）んだけど、確か二期以降のキャラクターが使ってるんだったかな。
ブルーノ（？）だっけ・・・しかも未来から来てるんだからやばくない？

「さらにレベル4以下のモンスターが特殊召喚されたことにより、TGワーウルフを2体特殊召喚！」

転生者

手札5↓3

ATK1200

ATK1200

流石はTG・・・動きがキモいわ。

三体並んでまだ召喚権あるって・・・コンマイ自重しろ。

「レベル3のワーウルフにレベル2のストライカーをチューニング！ シンクロ召喚！ TGハイパー・ライブリアン！」

ATK2400

あれ、あの厨二・・・嬉々としてシンクロ口上言いそうなのに、言わない。

何でだろ？

まあいいや、厨二だし。

「さらに神秘の代行者アースを召喚」

転生者

手札3↓2

ATK1000

TG代行か。

厄介だなあ・・・私あのデッキとの勝率五分五分なのよね。
つか初手で揃いすぎでしょ。

絶対積み込みしてるって。

「アースの効果発動・・・デッキからこのカード以外の代行者を手札に加える。俺様に加えるのは「ヴィーナス」チッ」

転生者

手札2↓3

TG代行ってはっきり言って動きがワンパターンなのよね。

こっちの体勢が整う前に一気に来るから対処出来ないだけで、こっちも速く動けるデッキなら喰らいつけるのよね。

え、デブダン？

無茶言うなし。

こっちは1ターンに1シンクロくらいが限界だったの。

「2体目のシンクロだ！ レベル3のワーウルフにレベル2のアースをチューニング！ 来い、A・O・Jカタストル！」

ATK2200

「そしてライブラリアンの効果でシンクロ召喚に成功した時、俺様

「は一枚ドロ―できる！」

転生者

手札3↓4

うーん、これはまずいな。

こっちは手札補充が貧弱なのに比べて向こうはシンクロするだけで手札が増える。

これもまたTG代行が流行する理由なのかな？

とりあえず向こうはこれで打ち止めだろうし、一応大丈夫かしら？

「ふん、カタストルでセットモンスターに攻撃！」

「（かかった！）セットモンスターはライトロード・ハンター・ライコウ・・・効果でライブリアンを破壊」

「何だと!?!」

「そしてデッキトップから3枚墓地に送る」

落ちたのは、レベル・ステイラーとボルト・ヘッジホッグに激流葬。

旨すぎるわ！

なんだ、これ。

でも激流葬はちょっと痛いわ。

それでもこの2体が落ちたのは美味しいけど。

「くっ、ターンエンドだ」

ええ、カード伏せないの？

何もしないってことは手札がモンスターだけ・・・ふっ。

「私のターン、ドロ」

遊奈

手札3↓4

この手札・・・ワンキルいけそう。
いややっぱしいけるわ、これなら。

「リバースカード、オープン。ワン・フォー・ワン・・・手札の
ンディライオンを墓地に送り、デッキからチューニング・サポータ
ーを特殊召喚！」

遊奈

手札4↓3

ATK100

「墓地のダンディライオンの効果で、綿毛トークンを2体特殊召喚

！」

DEF0
DEF0

これでレベル合計は3または4。

厄介なのはカタストル・・・なんだけど、問題はない。
よし一気に行くかな。

「デブリ・ドラゴンを召喚・・・効果でダンディライオンを特殊召喚！」

遊奈

手札3↓2

ATK1000
ATK300

「レベル1のチューニング・サポーターとレベル1の綿毛トークン、レベル3のダンディライオンにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

「合計は・・・9だと!？」

私としては、こんなガチカードを使う気はないんだけど・・・転

生者相手なら仕方ないよね☆

だって向こうはなんかのチート貰ってるだろうし、しかもTG代行だし。

手加減なんかしないって。

・・・したらフルボッコにされるって。

「氷結界の龍トリシューラ！」

ATK2700

おお、カッコいいなあ。

遊戯王世界に来たらデュエルばっかで飽きるかと思ったけど、そんなことないわ。

ソリッド・ビジョンが優秀すぎて、飽きる気がしない。

「トリシューラの効果であんたの墓地のアースと、フィールドのカタストル・・・そして私から見ても一番左のカードを除外！」

転生者

手札4↓3

「ちっ、ゴーズが」

ゴーズとか危なかったわ。

まあそんなこと言っても普通に倒せるけどね。

・・・順番間違えなかったら。

「そして再び綿毛トークンが2体・・・そしてチューニング・サポーターの効果で1枚ドロ」

遊奈

手札2↓3

DEF0

DEF0

「手札のレベル・ステイラーを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

遊奈

手札3↓1

ATK700

「レベル1の綿毛トークン2体にレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが横に現れたルーレットに銃を向ける。

乾いた銃声がルーレットを捉えた。
撃ち抜いたのは・・・ニトロ・シンクロン。

「シンクロ召喚・・・燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

ATK2800

「さらに魔法カード、早すぎた埋葬を発動・・・ライフを800払い、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

遊奈

LP4000↓3200

手札1↓0

ATK700

まだまだ出るよー。

具体的に言えば、シンクロ1にステイラー2かな。

ものすごいオーバーキルになるわ。

・・・まあカードを一枚も伏せないこいつが悪いんだけどさ。

「そしてトリシューラのレベルを一つ下げて、レベル・ステイラーを特殊召喚」

Lv9↓8

ATK600

今思ったけど、案外ステイラー打点あるのね。
レベル1にしてはってくらいなんだけど。

「・・・これも世の無常さね。レベル1のトークンとレベル・ステイラーにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング!」

再び回りだすルーレット。

狙いを定めて、パンツと乾いた音。

撃ち抜いたのは、当然ニトロ・シンクロン・・・って撃ちすぎだつて!

・・・パネル(?)が凄いことになっちゃった。

「・・・燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー!」

ATK2800

「馬鹿な・・・2体目だと・・・!?」

ふ、愚かな転生者よ・・・敢えて言ってあげる。
公式でもないのに、エクストラデッキなんて縛りがある訳ないじゃ

ん（笑）。

「ついでよ、トリシューラのレベルを二つ下げて、レベル・ステイラーを2体特殊召喚！」

LV8↓6

ATK600

ATK600

圧巻ね・・・。

中央にトリシュ。

その横にごっついナマモノが2体・・・その横におまけが2体。
元の世界でも、これワンキルしてないかしら？

「ダメ押しよ・・・リバースカード発動。装備魔法、団結の力・・・
トリシューラでいいや」

ATK2700↓6700

・・・！？ トリシュが巨大化した！

この廃墟に入りきらなくなって、外に出て行った・・・なんか、可愛い。

「えーと・・・全員でダイレクトアタック」

「う、うああああ!!」

「そうそう・・・ニトロ・ウォリアーの効果で攻撃力1000ポイントアップしてるから」

転生者

LP4000↓0

圧倒的な攻撃力によって完膚なきまでに蹂躪された厨二。
倒れ伏してぴくりともしない。
・・・今思い出したけど、これって闇のデュエルじゃん。
つまりこいつ死んだんだ。

「・・・う、うああ! 体が、俺様の体が・・・!!」

「あ、気絶してたのね・・・どうでもいいや」

「待て、俺様を生かしてくれ・・・頼む!」

えー。なんか一気に小物臭くなったなあ。

元から嘔ませ臭が溢れんばかりに滲み出てたけど、これはないわ。
・・・とはいえ、私も善良な市民だからね。
ちゃんと応えてあげないと。

「・・・うん――」

「助けてくれるのか!？」

「——それ無理・・・だって面倒じゃない？」

「ふ、ふざけ——」

サアーつと消えていく厨二。

最後の最後まで無様に散っていった。

凄く哀れな奴だったわ。

なんてったって、言葉を紡げなかったんだからねえ。

・・・なんか、思考がダークシグナー寄りになってきたって言うか、染まりきってる？

何故かは知らないけど・・・無性にシグナーと戦いたいわ。

戦いたい、というより会いたい？

会うのなら出来れば遊星と・・・ってあれ？

なんで遊星に会いたいのかしら。

ま、いいわ。

どうせすぐに会うことになるんだし！

九話『未知なる決闘者 その名は厨二!』(後書き)

遊奈「なんか、私ドライになってない？」

ダークシグナーになりましたし。

遊奈「じゃあ最後のアレは？／／／／」

アレとは？

遊奈「なんでもない！／／／」

おかしな人ですねぇ(笑)

とりあえず次回予告ですよ？

遊奈「んんっ・・・とうとう始まるダークシグナーとの決戦。巨人の塔で待つ私の下に遊星が現れた・・・しかしそこに京介もやってきた・・・!？」

始まる1対2の変則デュエル。

しかし二人は妙にお互い牽制している・・・これはまさか奪い合い!？

遊奈「んな訳ないでしょ！ 台本にないことを言うな！」

そうこのデュエルこそ、瀬川遊奈が、不動遊奈になるか・・・はたまた鬼柳遊奈になるかの分かれ道！

次回、遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう・・・第十話『恋する乙女は強いのだよ！ トライアングル・デュエル』

ライディング・デュエル、アクセラレーション！

遊奈「違う上に、混ぜすぎだーーーー！！！」

あれ、ディマクは？

遊奈「知らない」

十話『遊奈VS遊星&鬼柳 変則ライディング・デュエル!』(前書き)

投稿遅れてすいません。

もはや何も言うまい、です。

ではどうぞ。

十話『遊奈VS遊星&鬼柳 変則ライディング・デュエル!』

遠くの方で猿の地上絵が空に現れた。

ディマクがデュエルを始めたのだろう。

私には関係ない。

巨人の塔の上段に腰掛け、ただひたすらに待ち続ける。

まるで待ち合わせに遅れた恋人を待っているかのように。

ただ、ひたすらに・・・。

「・・・最近は妙に考えがクリアになってるわね。なんでかしら。考えることが無駄だともいうのかしらね?」

自分に言い聞かせる。

自分はおかしくないと、悪くないと。

体に乗っ取った地縛神こそが悪いと言い聞かせる。

何のために?

決まっている・・・太陽のような存在である遊星と共に居るためには、清らかなる自分で在り続けなければならない。

そう、信じて。

・・・だけど、何故そこで遊星の名が出るのかは・・・分からなかった。

待つこと・・・何時間だろうか。

暗く濁った宵闇の空が、黎明の輝きに照らされる。

まるで新たな時代の幕開けだと言わんばかりに。

———音が・・・聞こえた。

静寂を破る甲高いモーメントが脈動する音。

Dホイールのエンジンの回転音。

聞こえる・・・大きくなっていく・・・どんどん近づいてくる。

右腕の巨人の痣が教えてくれる。

シグナーが・・・ってあれ？

なんかもう一人居てる？

「遊星と・・・京介・・・！？」

こちらに向かってくるのは、赤いDホイールと青のDホイール。
グランドンとカイオーガ？

・・・まあ何にせよ、ただ倒すだけ。

塔に腰掛けていた場所から降りて、そのままスカイ・フライヤーに
飛び乗る。

ハンドルに掛けていたヘルメットを被り、エンジンを回す。

そして一気に二人目掛けて加速する。

お互いに向けて進んでいるため、当然その距離はすでにないに等しい。

もう衝突する、というところでブレーキをかけ、九十度ほど後輪を
前に出し横滑りしながら停止する。

遊星も、京介もお互いやることは分かっていたらしい。

まあ、挨拶のようなものだしね。

「・・・遊星、私に殺されに来たの？ 京介も、シグナーでもダークシグナーでもないのに来るなんて、馬鹿じゃないの？」

「いや俺たちはお前を救いに来た！」

「まったくいきなりな挨拶だな、遊奈。俺は遊星こいつが心配だから来たまでだ・・・それに見たいものもあるしな」

遊星は相も変わらず甘いわね。

それに比べて京介は、揺さぶっても意味なさそうね。

・・・だったら話は早いわ。

このデュエルで雌雄を決するまでよ。

「私は四の五の言うのは趣味じゃないわ・・・つまり、言いたいことは分かるわね？」

「そうだな・・・それが一番手っ取り早いぜ」

「このデュエルが俺と・・・いや、俺たちとお前の絆の架け橋となってくれる。俺は、そう信じている」

ふつ、まさしく主人公って感じね。

でも、だからこそ、燃えてくるじゃないの。

「だったら文句はなしよ・・・始めましょうか。闇の戦デュエルいを」

右腕を掲げる。

紫の炎がサテライトの大地を駆ける。

大地に刻まれた巨人の地上絵と、寸分違わぬモノが曇天の空に現れる。

再びエンジンを回し、くるっと前輪を前に向ける。

ちょうど、スタートの合図を待っているかのような体勢となった。

「さあ早く準備なさい……この体の疼きを止めるには、貴方達と戦うしかないのよ!」

「いいだろう……俺がお前を救ってみせる!」

「さあてデュエルの時間だあ!」

「「^{デュエル}決闘!」」

遊奈

LP 4000

手札 5

SpCo

遊星

LP 4000

手札 5

SpCo

鬼柳

LP 4000

手札 5

Spco

「先攻は私が貰う！ ドロー！」

遊奈

手札 5↓6

この手札・・・まずまずと言ったところ。

先攻1ターン目にそんなものが関係ある訳ないけど、報告という奴
よ。

「そうそう、ルールだけど・・・私↓あんたたち二人↓私というター
ンの変わり方以外は変わらないわ。それとフィールドは二人で一
つ。それ以外、つまり墓地と除外されるカードは個人で分ける・・・
これでいいわね？」

「俺はそれで構わねえぜ」

「俺もだ・・・だが、このルールはお前に不利じゃないか？」

確かに普通に考えれば私が不利。

だけでもその程度で揺らぐほど私は甘くない。

むしろその気遣いは舐められているみたいで不愉快ね。

「馬鹿にしないでくれるかしら・・・次のターンが来れば、地縛神が降臨するのよ？ そっちこそ大丈夫なのか聞きたいんだけどねえ、遊星？」

「！」

「ちっ、もしそれが本当なら、相当に厄介だぜ。俺が地縛神を倒す術はほぼない！ 遊星！ それまでにどうにかしろ！」

「あ、言い忘れてたけど・・・一対多もしくは多対多の場合は、基本的には全員、初めのターンには攻撃はできないというルールがあるのだけど？ もちろん、タッグデュエルは滅多にしないし、一対多なんてする機会がないから、知らないとも思うけど」

そんな風に言っただけど、前世の私が居た地域では最後のプレイヤーから攻撃が可能という感じだったんだけど、こっちの世界だとこんな風な考え方になった。

だってこっちの世界、色々と展開早いもん。

「つまりそのルールが適用される以上、地縛神は魔法・罠で妨害しない限りは確実に召喚される！」

「そういう事よ・・・私はGN^{フラッグ}一連合国の機兵を召喚」

遊奈

手札6↓5

DEF800

「さらにフラッグの効果発動・・・自分フィールド上にこのモンスターしか居ない場合、デッキからもう1体のフラッグを特殊召喚できる。来なさい！」

DEF800

「カードを4枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札5↓1

「一気に4枚も伏せた?! 迂闊に手は出せないな」

「だが、やるしかねえ! 俺のターンだ!」

鬼柳

手札5↓6

spc0↓1

遊星

s p c 0 ↓ 1

遊奈

s p c 0 ↓ 1

「インフェルニティ・ネクロマンサーを召喚」

鬼柳

手札 6 ↓ 5

D E F 2 0 0 0

「カードを二枚伏せ、エンドだ」

手札 5 ↓ 3

うーん、次がシンクロ主体の遊星だから確実にシンクロしてくるわね。

ここで怖いのは簡単に場を崩すジャンク・デストロイヤー。

そう簡単に出てくるとは思えないけど・・・主人公補正のある遊星だからねえ。

「行くぞ遊奈・・・俺のターン！」

遊星

手札5↓6

s p c 1↓2

遊奈

s p c 1↓2

鬼柳

s p c 1↓2

「（スピードカウンターが2つ・・・一気に行くか？）俺はS p
「エンジェル・バトンを発動！ 2枚ドロし、1枚墓地に送る」

手札5↓7↓6

「俺はジャンク・シンクロンを召喚・・・効果で墓地のボルト・ヘ
ツジホッグを特殊召喚！」

手札6↓5

A T K 1 3 0 0

D E F 8 0 0

さっきのエンジェル・バトンで落としていた？
相変わらずの揃い方・・・これだから主人公って奴あ。

「鬼柳、お前のモンスターを借りるぞ！」

「ああ！ あいつに一発でかいのをぶちかましてやれ！」

「分かった・・・レベル3のインフェルニティ・ネクロマンサーとレベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが自身のリコイルスターターを引っ張って、バックパックのエンジンを作動させる。

ネクロマンサーとボルト・ヘッジホッグが一行に並び、五つの星に変わる。

そしてジャンク・シンクロンは消え、代わりに3つの輪になった。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！ シンクロ召喚・・・粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ATK2600

しまった・・・さっきのはフラグだったのか。

迂闊に有り得ることを考えたから・・・私の馬鹿。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ シンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数までフィールドのカードを破壊でき

る！ 俺は2体のフラッグを破壊する！」

「残念、罠発動よ・・・戦死者の偉業！ 自分フィールドの『GN』と名のついたモンスターをリリースして、カードを破壊するという効果を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし破壊するわ！」

「くっ、ジャンク・デストロイヤーが・・・！」

「ちっ、GNシリーズ専用の除去防御か」

「そうよ・・・ただ難点を挙げるならカウンター罠ではなく、ただの罠ってことかしら」

スペルスピードの関係でカウンター罠には対応出来ないのよね。
最もカウンター罠を使う奴は、この世界にはほぼ居てないのでしょ
うけど。

「もう通常召喚はしたか・・・ならば、カードを3枚伏せてターン
エンド」

手札5↓2

遊星のフィールドはがら空きになったけど、十中八九かしさんが
居てるわね。

アニメ効果の地縛神の前には無意味だけど・・・。

あれ、でも確か遊星サイドの人間が勝ったってことは・・・地縛神の攻撃を止める術はあるってことよね？

・・・対策されてる・・・絶対に対策されてる。

ま、まあガチカードとかが無いだけ・・・マシよね？

「私のターン」

遊奈

手札1↓2

s p c 2↓3

鬼柳

s p c 2↓3

遊星

s p c 2↓3

「さてそろそろ行かせてもらいましょうか・・・まずはリバーサイド発動、エンジェル・リフト！ 墓地のレベル2のモンスター・・・つまりさっきリリースしたフラッグを特殊召喚！」

A T K 9 0 0

「そして2体のフラッグをリリース！ 深き闇の底より、地に縛られし大いなる邪神が蘇る！ 降臨せよ、地縛神 C c a p c u A p

u!
」

手札2↓1

ATK3000

曇天の空に、歪な形の心臓が現れた。

そしてサテライトのそこかしこから人々の魂が、心臓に吸収されていった。

大きく、脈動する。

まるで人の魂こそが至上の餌だと言わんばかりに。

一瞬の間を置いて・・・巨大な腕が、天を突く。

巨大な腕が、サテライトの地を強く叩きつけた。

そこが支えとなり、青のラインが入った巨人がのっそりとその姿を現す。

「2ターン目から出てきやがったか」

「倒すのは難しいかもしれない・・・だが、止める術ならば、ある！」

「ふうん、随分粋がってるけど・・・この前、このガチャピン・・・じゃない、コカパク・アップに殺されそうになったのはどこの誰だったかしら？」

「ぐっ」

「そして私のターンもまだ終わらない・・・まずはシグナーとダークシグナーの聖戦に、愚かにも人の身で乱入してきた京介に、神の鉄槌を下してあげる・・・やりなさい、コカパク・アップ」

コカパク・アップが腕を振り上げる。

圧巻と言うに相応しい巨体が腕を振り上げているさまは、凄まじい威圧感がある。

勢いのままにコカパク・アップの掌が、京介に迫る。

「そうはさせない！ 永続罠、強制終了！ このカード以外のカードを墓地に送り、バトルフェイズを終了する・・・俺の伏せカードを1枚墓地に送って、このバトルフェイズを終了させる！」

「面倒なカードを・・・メイン2、GN-Xを召喚・・・エンド」

手札1↓0

DEF1000

とうとうハンドレス。

これがインフェルニティだったら万々歳なんだけどねえ。

まあ京介はハンドレスにさえさせなかったら良いんだし、伏せにはある意味インフェル殺しのカードがあるからいいか。

「俺のターンだ」

鬼柳

手札3↓4

s p c 3↓4

遊星

s p c 3↓4

遊奈

s p c 3↓4

「リバースカード、極限への衝動！ 手札を2枚捨て、ソウルトーカーンを2体特殊召喚！」

手札4↓2

DEF0

DEF0

「・・・？ 何がしたいの？」

「まあ待てよ・・・カードを1枚伏せて、インフェルニティ・ミラーージュを召喚！」

手札2↓0

ATK0

・・・ハンドレス！

そしてあのモンスターの効果は、マズすぎる！

「・・・さっきの罠、無効に出来るカード有ったんだけど・・・使
っていい？」

「ククク・・・駄目に決まってるだろうが！ ミラーージュの効果発
動！ 手札が0の時、このカードをリリースし、墓地のインフェル
ニティを2体特殊召喚！ 来い、ネクロマンサー、ドワーフ！」

DEF2000

ATK800

この展開力・・・トラウマものだわ。

かつてのBFを彷彿とさせるわね。

・・・あ、クロウもこんな感じだったわ。

「そしてネクロマンサーの効果だ・・・手札0の時、墓地のインフ
エルニティを1体特殊召喚する・・・現れる、インフェルニティ・
リベンジャー！」

ATK0

場が埋まった!?

えっと、トークンが2体で2、ネクロマンサーは3、ドワーフ2のリベンジャーが1で・・・全部で8!?

「行くぜ? レベル1のトークン2体とレベル3のネクロマンサー、レベル2のドワーフにレベル1! インフェルニティ・リベンジャーをチューニング!」

リベンジャーが空に飛び、一つの輪になった。

その中に残りの4体が飛び込む。

かなりの贅沢さね。

全モンスターのレベルが4以下とか・・・遊星もよくやるか。

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる! シンクロ召喚! これが死神の真の恐怖! いでよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン!」

ATK3000

輪の中を閃光が貫く。

その中から、脳が半分出ているかなりグロいドラゴンが現れた。

「こいつが俺の新しいエースだ・・・まさか敵に花を渡すことになるとは、思ってもいなかっただろ、遊奈?」

「そうね・・・まったく私も馬鹿なことをしたわ・・・とりあえず
罨発動、負傷兵の突撃。自分のGNモンスターを1体破壊し、相手
モンスター1体を2回目の相手のスタンバイフェイズまで除外する」
足が片方もげたGN-Xがデス・ドラゴンに組み付き、真後ろに開
いた真っ黒な穴に突っ込んでいった。

「ちっ、効果を使う間もなかったか・・・俺はこのままエンドだ」

そらそうよね。

インフェルニティは展開力は凄まじいけど、一度止められたらぴた
っと止まるのよね。

それが魔法カードを使えないライディングだと尚更ね。

「俺のターン！」

遊星

手札2↓3

s p c 4 ↓ 5

遊奈

s p c 4 ↓ 5

鬼柳

「そうだ・・・負傷兵の突撃の効果なんだけど、『相手』の2回目のスタンバイフェイズに戻ってくるだから、この時点でもう1回目は終了したわ。良かったわね、京介」

「はっ、どうせお前のことだ・・・対策でもしてるんだろ？」

「それはどうかしらね」

「行くぞ遊奈・・・俺は手札のモンスターを1体墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚・・・さらに墓地のボルト・ヘッジホッグの効果発動！ 自分フィールドにチューナーが居るとき、特殊召喚できる・・・来い、ボルト・ヘッジホッグ！」

手札3 ↓ 1

これはお決まりのコンボ・・・！？
この2体で出るのは7。
・・・アーチャーか！

「クイック・シンクロンは『シンクロン』と名のつくチューナーの代用に出来る・・・俺が選択するのはジャンク・シンクロン！」

クイック・シンクロンの横に現れるルーレット。
それに銃を向けて撃ち抜く。

穴が出来たのは宣言どおり、ジャンク・シンクロン……でも、結構ぎりぎりね。

案外外しやすいの？

「レベル2ボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

このデュエルで3回目の緑色の光る輪。

その中にボルト・ヘッジホッグが飛び込んだ。

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！ 光さす道となれ！
シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・アーチャー！」

ATK2300

前はミスして良い所がまるでなかったけど、今回はどうなるのかしらね。

前にルドガーと戦って、地縛神は攻撃対象にならないからプレイヤーにダイレクトアタックが出来るということを知ったから、それを狙ってくるでしょうね。

ただ、遊星のことだから、念には念を入れて、とでも考えているのでしょうね。

そうしてくれると助かるけど。

「ここは・・・ジャンク・アーチャーの効果発動！ 1ターンに1度、相手モンスターをエンドフェイズまで除外できる！」

「かかったわね！ カウンター罠発動！ 敗残兵の意地！ 相手が効果モンスターの効果を発動した時、その相手モンスターのレベルと同じになるように墓地のGNモンスターを除外することでその効果を無効にし、このデュエル中はその効果を発動できなくなる！ 私は墓地のレベル2のフラッグ2体と、3のGN-Xを除外！」

「なに！？ だが、地縛神は攻撃対象にならない代わりに、プレイヤーへのダイレクトアタックを許している！」

「それも無意味よ・・・この効果で効果を無効にされたモンスターは攻撃できない・・・永続的にね」

効果を発動させるには、ちょっと条件が厳しいけど、それでも十分にひどい効果よ。

ま、相手はシグナー・・・というかメインキャラ。どうやっても越えてくるでしょ。

「遊星！ 俺のモンスターを使い！ リバースカード、エンジェル・リフト！ 俺はリベンジャーを蘇らせる」

「レベル1・・・分かった、借りるぞ鬼柳」

「ああ、持っていけ」

「レベル7のジャンク・アーチャーに、レベル1のインフェルニテ

イ・リベンジャ―をチューニング!」

本日4回目のシンクロ。

流石にここまで来ると、積み込みを疑うけど、それはないんでしょね。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ! シンクロ召喚! 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!」

ATK2500

それにしても、まさかここでスターダストとはね。

この展開は今まで、(こっちの世界で)生きてきた中でもかなりのご都合展開ね。

「スターダストで、遊奈にダイレクトアタック! 響け、シューティング・ソニック!」

「うぐあああああ!」

遊奈

LP4000↓1500

spc5↓3

「痛い・・・痛いわ・・・遊星ええええ!!」

「くっ・・・ターンエンド」

「この痛みを、何十倍にもして返してあげるわ・・・あはははは!!」

遊奈

手札0↓1

s p c 3↓4

鬼柳

s p c 5↓6

遊星

s p c 5↓6

「スピードカウンターが2つ以上あるから、このカードは発動できる・・・S p エンジェル・バトン」

手札1↓0↓2↓1

「まずはその鬱陶しい竜からよ・・・コカパク・アップ、その目障りなのを潰しなさい」

「(まずい! もう強制終了のコストはスターダストしかない・・・

そうなった場合、3000のダメージを喰らう。それならば！）すまない、スターダスト・・・！」

遊星

LP4000↓3500

スターダストは反撃しようと思ったが、それよりも早くコカパク・アップの掌がスターダストを押しつぶした。

そこで止まらずに、地面に掌が叩きつけられたことで、衝撃波が遊星を襲った。

「うあああああああ！」

遊星

LP3500↓1000

spc6↓4

衝撃波に揺さぶられ、クラッシュ寸前となった遊星。
だが持ち直しそのまま加速して追いついてくる。

「なにか勘違いしていたみたいだけど、コカパク・アップの効果は戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるのよ・・・つまり攻撃表示モンスターを破壊すれば、実質ダイレクトアタックと一緒なのよ」

「まずいな・・・この調子だとどうすることも出来ない・・・いや、

俺が攻撃力1500以上のモンスターを引けば勝てる！ それに次のスタンバイで俺のデス・ドラゴンも帰ってくる・・・次で、俺たちの勝ちだ！」

希望を見出したところ、悪いんだけど。

この世界においては、説明は負けor失敗フラグなのよ？

「カードを1枚伏せてエンド」

手札1↓0

「行くぜ、俺のターンだ！」

鬼柳

手札0↓1

s p c 6↓7

遊星

s p c 4↓5

遊奈

s p c 4↓5

「デス・ドラゴンが戻ってくるぜ」

ATK3000

地面から這い出てくるデス・ドラゴン。

・・・あれ、前は普通に空に出来た穴から出てきたのに。

「そうそう実は除外から特殊召喚は一連の流れじゃなくて、別々のよね・・・だから召喚時にも罠にかかる・・・罠カード、奈落の落とし穴・・・デス・ドラゴンを破壊して除外」

「くっ、だが引いたのは・・・インフェルニティ・リローダー！
召喚だ！」

ATK900

「そして効果を発動だ。手札が0の時に一枚ドロし、モンスターならレベル×200のダメージを相手に、魔法・罠カードなら500のダメージを自分に与える・・・俺が引いたのは、リビングデッドの呼び声。罠カードだから俺が500のダメージを受ける」

鬼柳

LP4000↓3500

「ダメージは与えられなかったが、それでも次のターンで遊星が攻

撃すれば終わりだ・・・リローダーで遊奈にダイレクト」

「待ってくれ鬼柳！」

唐突に何を言い出すのかしらこの蟹さんは。

京介の言うとおり次の遊星のターン、残ったリローダーで攻撃すれば終わり。

なのにここで止める必要はあるの？

「ここで鬼柳が攻撃し次のターンで俺が攻撃させれば勝てるかもしれない・・・だがそれで本当に遊奈に勝ったと言えるのか？」

「・・・つまりお前はあの地縛神を倒してこそ、遊奈を解放できると考えているのか？」

「ああ。だから・・・待って欲しい」

「分かった・・・ただし、次で決められなかったら、お前は死ぬぞ？」

「分かっている。だからこそ、あと1ターンだけでも欲しいんだ」

何この展開。

なんかアニメっぽいし、熱血っぽいわ。

そういうのは好きだけど、まさか目の前で展開されると思わなかった。

「1枚伏せてエンド・・・遊星！　もし地縛神を倒せるカードが来なかったら、ぶん殴るぞ？」

「分かっている。必ず引いてみせる！」

それは自分に気合を入れるためのものだったのかしら？
デッキトップに手を乗せ、目を瞑る遊星。

その瞬間、まったくの不意打ちと言えることが起こる。
まさに天外の出来事だった。

どうして予想できるだろうか。

遊星の背中に全ての赤き竜の痣が一つになったものが背中に浮かび上がるなんて。

同時にデッキトップも輝きだした。

まるでこのカードを使えと言わんばかりに。

遊星は、わずかに力を加え・・・そのままドロ―する。

遊星

手札1↓2

s p c 5↓6

遊奈

s p c 5↓6

鬼柳

s p c 7↓8

ようやく目を開く。

表情には、笑み。

何が来たか。

どう使うか。

理解しているのだろう。

「俺は、救世竜 セイヴァー・ドラゴンを召喚！」

手札2↓1

ATKO

「鬼柳、また借りるぞ！ リビングデッドの呼び声を発動！ 蘇れ、スターダスト・ドラゴン！」

「まさか・・・まさか・・・」

「行くぞ遊奈！ これが俺たちの絆の証！ レベル1のインフェルニティ・リローダーとレベル8のスターダスト・ドラゴンに、レベル1の救世竜 セイヴァー・ドラゴンをチューニング！」

飛翔するスターダストとリローダー。

そこに、空に染み渡るように大きくなっていくセイヴァー・ドラゴンが重なる。

それはまるで伝説の赤き竜のようだった。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！
シンクロ召喚！ 光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

ATK3800

赤い輝きが晴れて現れたのは、美しい光を伴った竜であった。
その姿はどこかスターダストの面影を残しながらも、その力強い翼
をもう2つ増やしていた。

「セイヴァー・スターの効果を発動！ 相手モンスターの効果は無
効にし吸収する！ サブリメイション・ドレイン！」

「地縛神が、無防備に！？」

「これで地縛神への攻撃が可能となった！ もう遊奈を縛りつける
ものも存在しない・・・セイヴァー・スターよ！ その名が示す通
りに、遊奈を救い出せ！ 地縛神に攻撃！ シューティング・ブラ
スター・ソニック！」

セイヴァー・スターが咆哮し、ぐんぐんと加速する。

限界を超えて突き進むその力強さに溢れた総身が、コカパク・アップ
を貫く。

そして・・・コカパク・アップは地に呑み込まれて行く。

遊奈

LP1500↓700

「遊奈・・・遊奈・・・！」

「・・・遊星、どうしたの、そんな顔して」

妙に鮮明になった視界の中で、遊星が辛そうな顔でこちらを見ている。

遊星の顔を見ていると、何故だか鮮明になった視界が滲み出した。視界の中で遊星が慌てている。

「ど、どうしたんだ遊奈。どこか痛いところでもあるのか・・・！」

ふふ、それじゃ怪我した子供を相手してるみたいじゃない。私が微かに笑ったのを見て、安心したように息を吐く遊星。

「私、分かったわ・・・今、私は泣いてるのね？」

「どう、したんだ？」

「今までシグナーと戦うことばかり考えていた私は、心に余裕がなかった・・・だから今、その重圧から解放された心が歓喜に叫んでいるんだわ」

「・・・遊奈」

視界の中の遊星は、やっぱりちつとも笑わない。
でも心配してくれているのは、とてもよく分かる。
そんな彼の腕の中だから・・・安心できる。

「ねえ遊星」

「なんだ？」

「最後に・・・良い・・・？」

「最後なんかじゃ・・・ない」

そう自分に言い聞かせている遊星。
だけど本当は分かっているとも言いたげな顔をしている。
きっと信じたくはないと・・・そう言いたいよね。

「ううん、最後・・・ね、顔。もっと近くで見せて」

「こうか？・・・！」

近づいてきた遊星の顔に合わせるように、私も顔を寄せる。
今度の視界の中は遊星だけで一杯だった。

顔を離せば驚いた表情をしていた。
それだけでもすごく価値のあることだった。

「遊星・・・好き・・・」

視界が端から流れていく。

以前京介が消える瞬間を見たけど、多分そんな風に消えていつてるのだろう。

だけど不思議と心残りはなかった。

予想だけど・・・前から心の奥でつかえていたものが無くなった上に、その気持ちも一緒に言えたからだろう。

だけど、もっと・・・もっと欲を言うのなら。

遊星と一緒に居たかった。

それが最後の・・・私の心残り。

十話『遊奈VS遊星&鬼柳 変則ライディング・デュエル!』(後書き)

遊奈「／／／／／／／／／／」

すごい積極的ですね。

今までのフラグ回収ってやつですか？

遊奈さん、まじパネエっす。

遊奈「やめて、ほんとにやめて。今どれだけ恥ずかしいと思ってるの？」

さあ？

だって私、遊奈さんじゃないし！。

遊奈「ぐっ、龍亜みたいなこと言って」

あれ、あなた龍亜のこと知ってましたっけ？

遊奈「この空間の私はあんたの知識を貰ってるのよ？」

ああ、そうでしたね。

とりあえず次回予告・・・いつとく？

遊奈「そうね。それじゃあ・・・ダークシグナーとしての重圧から解放された私。けど問題はまだ残ってて？」

機兵と悪魔・・・どちらかを選べと迫られる遊奈の明日は？

遊奈「いきなり壮大にするな・・・そして帰ってきた日常。けど記

憶は残っていて、家出？」

次回、遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう第十一話『刹那』
君はガンダム之力を見る。

遊奈「それ元ネタの方だからーーーーー!!」

最後までディマクはぶっちゃった。

遊奈「もう、いいんじゃない？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9478x/>

遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう

2011年12月19日21時56分発行